



いつき野の風に吹かれて

牧野澄子自伝

图 1 二〇〇九年七月七日写



生いたち

柳井保、千世子の長女として、大正五年四月二五日、柳井家の納戸で生まれた。だが、当時、大伯父の柳井万作が村長をしており、早生まれとなる四月一日出生の届け出をしたという。

そのためか、少し知恵が足りないような気がする。

ただ、生まれてから物心がつくまで、小学校の四年生くらいまで、あまり憶えていないけれど、現在の牧野家の分家の叔父牧野芳之（七九歳で没す）先生に「二年生の時、習ったことは憶えている。聞くところによれば、とてもおとなしい子で、国語の「ハナ、ハト、マメ、マス」を習った際、「澄ちゃん、読みなさい」と言えば、「ハナ」と言っでは泣き、「ハト」と言っでは泣いていたという。

弁当を食べる時も、前かがみになり、手で隠して伏せつつ食べているような、たいへんな恥ずかしがり屋だったらしい（それなのに、今では私もすっかり変わり、心臓は上齋一の強さで、「上齋放送局」と言われるほどのおしゃべりになっている）。

子どものころは外に出るのが好きだった。祖母の「せき」おばあさんが初孫の私が可愛

くて仕方なかったらしく、いつも私を背負って、分家（『方作』の弟柳井茂三郎宅）に毎日遊びに連れていってくれた。

一方、柳井家では小作人に「守り子」を頼んでいた。今では藤田さんの家になっている所に、一間きりの三軒長屋があり、その一軒に「小椋さき」という人がいた。その人は、下齋原の鶏小屋の一角を借り、草履や草鞋を作っている八四歳のおばあさんだったが、私の守をしてくれていた。彼女は、私をたいそう可愛がり、たびたび湯通ししたお餅にきな粉をまぶして食べさせてくれたのをよく憶えている。その後も、草履、背負子など作って、私の一生の間あるように、と持ってきてくれた。

もう一人、忘れがたい人がある。原の畠の尻の方に一軒家のあばら屋があつたが、そこで鍛冶屋をしていた人のお嫁さんだ（お嫁さんという若そうだが、四〇歳くらいだったろうか。昔の四〇歳といえば、想像もつかないほどの「おばあさん」で、めくら縞の黒い着物を着て、顔も手もしわしわだった）。その人が朝に晩に来ては、川に浸けてある鍋や釜を洗い、板の間に両手をついて、「御寮人さん、また明日来ます」と挨拶をして帰る美しい姿（主のためなら、どんなことでもいたします、という姿）が心に焼きついて離れない。

先にも述べたように、小さい時のことはほとんど憶えておらず、尋常三、四年のころからの記憶しか残っていないのだけれど、そのころ、立垣先生といって、眼鏡をかけた男の

先生に習っていた。同級生に、三船の仁ちゃんという女の子がいた。仁ちゃんのお父さんは助役で、私の父は村長をしていたが、仁ちゃんはそれが癪にさわっていた。それに、仁ちゃんのお母さんは早くに亡くなり、仁ちゃんはおばあさんに育てられていた。でも、私の母は明石の師範学校を出ていて「ハイカラ」で、箸より重い物を持ったことがないような人だったが、そんな人が、狸が出るか狐が出るか分からないような上齋原の地主の家に、奥津から嫁に来ていた。仁ちゃんにはそれも癪の種だったらしい。

仁ちゃんはべっぴんさんで頭がよく、勉強もよくできたので、大将だった。或る時、私が赤いセーターを着せられて学校に行ってから、私は「赤猿」と言われるようになった。

昔は綿を紡ぎ、冬（十一月ごろから四月ごろまで）の間に、女は家族みんなの仕事着や縞の着物を機で織り、男は草履を作ったりしていた。学校にもそれらの着物を着、前掛けをして、帯も紺に染めたものを締め、草履を履いて通っていたので、セーターというハイカラなものを着てきた私が仁ちゃんには憎らしかつたのだろう。

でも、私はまだましな方だった。

仁ちゃん是他の子に、冬ちゃんという女の子のお尻を出させ、墨をつけた筆で、泣き叫ぶ冬ちゃんのお尻にベタベタと落書きしていたのが、昨日のここのように思い出される。

昔にもいじめはあったが、学校から帰ったらすぐに裏山に栗拾い（地面が赤く見えるほ

ど落ちていた）に行ったり、家の手伝い（毎日のランプ拭きや子守り等々）をしなければならなかったので、いじめられてもよくよしている暇はなかった。いろんなことを考える暇がなかったので、すぐに忘れるけれど、また明くる日には同じことの繰り返し。

その後、仁ちゃんは県立女学校を出て、よい家にお嫁に行き、大阪の方で大きなダイヤの玉を指にはめていたそうだけれど、神経痛とかで手や足が動かなくなり、七十何歳かで亡くなったという。気の毒だとは思いますが、小学校時代のことを思えば、ばちがあつたのではという気がする。

五年生になると、複式授業ではなくなり、仁ちゃんのいじめも止んだ。

先生は友保先生という女の先生になったのだが、今度は、男の子が女先生を馬鹿にして、授業中にもよく騒ぎ、先生を困らせていた。

この同じ年、大正天皇が崩御され、お宮にお参りして泣いたことも憶えている。

忠魂碑が学校の入口に建った日のことも忘れがたい。

そのころからだったか、毎朝、藤木校長先生（昔、池田家といっていた家から出た上齋の人）が全校生徒を講堂に集め、教育勅語を読まれるようになった。生徒はその後教室に戻って授業を受けた。教育勅語は、菊の紋のついた一枚の紙に書かれており、それを厳かに読んだ先生は、くるくると巻いて桐の箱に納め、扉の中にしまう。

このころ、私たち生徒は、天皇陛下は神様で、次に偉いのは先生で、屁も放らないのだと思っていた。それに、修身の時間があり、嘘をついてはならぬとか、二宮金次郎のことを習った。薪を背負って本を読んでいる金治郎の銅像が学校の玄関に建てられていたのを感じ出す。

冬ともなると、赤和瀬の方から通ってくる生徒は、二里も三里もある雪道を、着物を着て「あら」を扱い¹で出てくるので、着物の裾がバリバリに凍りついて、氷が垂れ下がり、始業時間に遅れることもしばしばだった。それでも遅れて来ると、教室の後ろに立たされていた姿が、今も目に浮かぶ。先生は早く火鉢に当たらせてやればいいのに、いつも思っていた（これが後に、夫となった牧野松寿が村長の時代、村の中心である石越に学校を建てるべきだということになり、奥の人々と本村の間で話し合いがもたれ、揉めに揉めた結果、石越に学校が建てられることになった。私は複雑な気持ちだった）。

いよいよ六年生になった。尋常を卒業すると、女子は高等女学校へ、男子は中学校への進学で津山に出る。上の学校へ行くためには勉強しなければならないのに、学校から帰ると、昼は弟や妹の子守りをしなければならなかった。夜、家に下宿していた難波先生とい

¹ 「あら」は新雪の意。「あらを扱う」とは、新雪をラッセルする意。

う眼鏡をかけた男先生に勉強を教えてもらったが、眠くて眠くて、何も頭に入らなかった。母は、弟や妹たちが寝静まってから、私に勉強させるのだが、昼間、子守りなどして疲れているので、つい居眠りをしてしまう。すると、二尺差しでピシヤリと頭を叩かれ、驚いて目が覚める。でも、同じ所ばかり何度も読むものだから、裏の食堂（昔の家だったが、ちよつとハイカラで、食事をする部屋が独立していた）の中を流れる小川のそばに連れて行かれ、その小川によく頭を突っこまれたものだ。

このころまで、私は他県に一度も出たことがなかった。六年生の時、一度、岡山で博覧会があつて行つたときのこと、津山に出るまでの院庄の田んぼ一面に麦が植えられているのを見て、そんな光景を見たことのない私は、先生に「あんなたくさんの葱、どうして食べるん」と尋ね、笑われた。

嘘のようだが、蒲鉾は板を背負つて海を泳いでいると思つていたし、ランプから電氣に変わった時は、ランプと同じように吹けば、灯は消えると思つて何度も吹いてみたという、笑えないエピソードが私には幾つもある。

父、保には三人の姉がいて、三人はみな高等女学校を出ていた。一番上の「つぎ伯母さん」は、今の鏡野町円周寺の百姓家（夫は勤め人で、日笠義一）に嫁に行き、二番目の「玉伯母さん」は岡山に嫁入った。

つぎ伯母さんはとても美しい人で、上齋原の若い人たちの羨望の的だったという。玉伯母さんには、昌子という美しい女の子が生まれたが、伯母は亡くなってしまう。そこで、三番目の姉（みよし）が後妻に入り、房子という女の子が生まれた。

二人の女の子は、毎年夏休みになると上齋にやって来る。昌子は私より二つほど年上で、房子は私と同じ年だった。この二人の従姉妹のうち、年上の昌子は上品にホホホと笑う。房子は父親似の丸い顔に四角い身体、私のようだった。房子とは、雨さえ降れば裏の田んぼの溝に泥鰌や²「はえご」を獲りに行った。³「そうき」とバケツを持っていき、踏んで、たくさん獲ってくるのだ。それには母も何も言わなかった。でも、私たちが喧嘩をすると、母はよく私を怒ったり、叩いたりした。

とにかく私は、何かにつけよく母に怒られた。母は全部私に当たるのだ。すぐ下の妹など、私が叱られていると、母の前に座り、「お姉ちゃんを叱らないでください」と言つて、私を庇ってくれた。でも、妹が叱られている時、私は母が怖くて何も言えない。すると、「澄ちゃん、あんたが叱られている時にはまこちゃんが謝るのに、あんたも謝ってやりなさい」と叱られる。それで、まこちゃんが怒られている時には、「お母さん、まこちゃんを叱らな

² 小型の鰻（はえ）。

³ 箆器。竹で編んだざる・かごの類。

いで」と言つて、とんで逃げた。

まこちゃんはまだ、私が叩かれそうだと思うと、母の前にきちんと両手をつき、「お姉ちゃんの代わりに私を叩いてください」と言うので、母は妹の方が可愛かつたらしい。一度、おばあさんに、「うちのお母さんは継母なん」と尋ねたことがある。

母には叱られることしか知らなかった。でも、その分祖母や父が可愛がつてくれたので、ひねくれもせず成長することができた。

母は忙しい人だった。朝から晩まで養蚕に、牛飼いに、草刈り、桑の手入れにと働きつづけていた。父も朝晩は家の仕事を手伝うが、村長だったので、いつも役場に出ていて留守だった。昔は何もかも人の手と足で働きに働くしかなかった。自動車などなく、大八車でもあればけっこうな方で、全部人が「背」に負ってこなすしかなかったのだ。風呂（鉄砲風呂といって、丸い鉄の釜だった）の水も、前の小川から五回も六回も汲んでは担ぎして桶にはったものだ。

雨が降れば降ったで「降り仕事」、晴れば晴れたで「晴れ仕事」。木の芽が出始めると田植え。田植えが済むと養蚕だ。奥の間から中の間、家中の畳を上げて棚を組み、お蚕を飼う。一〇〇箱くらい上げ下げしては桑の葉採りに行く。これこそは降っても照つてもしなければならぬ仕事。お蚕は生きているのだから。

この養蚕の時期は、納戸から奥から何処も彼処も家中お蚕でいっぱいになるので、人間は蚕棚の下で寝ていた。大切な現金収入の手段だった。蚕の糞も粗末にはしない。蚕の糞は、冬の間の牛の飼料になるので、集めて干して取っておいた。

勉強もようしないまま、六年生の日々は過ぎていった。当時、上齋からは二人か三人しか女学校や中学校に行く人はいなかった。私は何も分らないまま、高等女学校に行きなさい、と言われ、受験することになって、津山に出た。格子戸の付いた家らしい家を見たのはこの時が初めてで、何を見ても珍しかった。津高⁴に連れて行ってもらったときには、校門が檻のようなあ、と思ったことだけが記憶に残っている。

女学校受験のため津山に出た時、いろいろお世話になったのは、林田稲太郎という開業医の娘さんで、高女卒業の昭子さんという美しい人だった。林田稲太郎という人は藤木勇次郎の兄弟で、河野の林田に婿入りし、林田姓を名乗って医院を開業していた。『おじ』である。

私が『おじいさん』と呼んでいた大伯父柳井万作には子どもがなかった。そのため、妹の『せき』に婿養子（村長の藤木勇次郎の弟）をとり、柳井家の跡をとらせていたが、早死にってしまったという。

高等女学校の受験については、口頭試問と筆記試験と二日あった。でも、どんなにして試験を受けたのか、何も憶えていない。この年、小椋仁ちゃんも合格、私は落ちてしまい、泣く泣く上齋に帰った。男子では、藤木誠、藤木孝雄という二人の生徒が津中に入学した。

私たちは高等（小学校高等科）一年生となり、一年生と二年生が同じ教室で習った。担任は岡崎先生といって、背の高い眼鏡をかけたよい先生だった。

このころから私も少しずつよく勉強するようになり、夜、柳井美枝ちゃんと同級生のところの「かぜ屋」に下宿していた人の、今で言う「塾」のようなところに通っていた。小椋義弘先生に習字を習い始めたのもこのころである。私が鼻水の落ちるのにも気づかず、一所懸命習字に励んでいたら、まわりの人たちが笑った。すると、先生が「鼻水の落ちるのも分からないくらい一所懸命書いているのに笑うな」と、同級生を叱ってくださったこともあった。

また、このころのこと。青年学校の窓からじつと私のことを見ている人がいて、不思議に思っていたら、ある日、手紙が硯の下に置いてあるのに気づいた。その人からの手紙だった。帰って便所に入り、読んで捨てた。内容は、若いころにありがちのものではなく、勉強のことばかりだったけれど。後に分かったことだが、そのころ、私は「分限者のお嬢さ

⁵ 門屋（かどや）だが、この地方では「かぜや」「かでや」ともいう。

ん”で、高嶺の花のような存在だったという。

女学校時代

翌年四月、再び、一尺八寸の袖の、絹の着物に臙脂の袴をはき、津山実科高等女学校を受験するために津山に行った。同級生で受験するのは、上齋からは私一人だったので、母がつれていつてくれた。津山の女子校の生徒たちが大勢でよくしゃべるのには驚いた。その時、日本原の医者の娘で甲田春海という人も母親につれてこられていて、その人と一言二言話したが、町に出てきた田舎者にとっては、不思議なことばかりだった。

受験は成功し、晴れて津山実科高等女学校の生徒となった。寄宿舎が津山城の下にあり、先輩の田淵美恵ちゃんの部屋に入れてもらった。田淵美恵ちゃんは酒屋の娘さんで、小さいころからお正月になると、晴れ着を着て美恵ちゃんの家に出かけ、カルタ取りなどして遊んでいたので心強かった。

寄宿舎には、三人部屋、五人部屋、七人部屋等々、全部で十二部屋ほどあった。私の入れてもらった部屋は、一番端っこの三人部屋、六畳間だった。美恵ちゃんと私、そして最も年上の池田という人が同室となった。池田さんは、今の鏡野町中谷の人で、とても温厚

な人だった。

津山での学校生活が始まったものの、北の空を見ては泣いていた。今は、津山の学校に行っている、日曜ごとに親兄弟が迎えに行ったり、バスで帰ってくることもできるが、昔は自動車もなく、四月に出ると八月の夏休みまで帰ることができなかった。父や母、祖父、祖母、弟や妹たちのことを想い、北の空を見てはよく泣いた。

ある時、腰にたくさんの鈴をつけた若い男の人が「号外！ 号外！」と言ってやって来た。不思議に思っ「あれは何なん」と友だちに尋ねたら、あれは日本の偉い人に何かあった時に来るのだと教えられ、しばらくの間は号外が出るたびに飛んで出ていた。それを見た友人が「柳井さん、なんでそんなに飛んで出るの」と訝しげな顔で言う。当時、私の父は上齋で村長をしており、私は父を偉い人だとばかり思っていたので、父が病氣したり死んだりしても号外が出るものと思ひ込んでいた。それで、その話をしたら、大笑いされてしまった。

一学期が終了し、夏休みが来た。生徒たちはそれぞれ帰省するのだが、奥津と上齋からの生徒は四、五人で一台、奥津にあつたタクシーを頼んで帰った。帰って、両親に通知簿を見せると、父が「小学校時代は叱られるばかりで成績が悪かったが、津山の学校に出て

からはよい点が取れるようになったな」と言って褒めてくれた。嬉しかった。考えてみると、家にいるときは弟や妹たちの守り、手伝いで時間が過ぎていったが、津山ではそうしたこともなく、勉強、勉強だったから当然だった。この時、初めて、やればできるのだと思った。

勤叔父のこと

夏休みの柳井家は大賑わいだった。優叔父、智叔父、勤の叔父さんたちも大学から帰ってきたし、岡山の伯母さんの二人の女の子も来て、それはそれは賑やかだった。叔父たちが朝早く草刈りに行き、帰ってきて裸で朝ご飯を食べていたのを懐かしく思い出す。

一番下の、早稲田大学に行った勤叔父さんは中学四年生で飛び級して大学に入ったという。数学的な頭がよく、友人たちは勤叔父の机を削って飲んだという逸話を祖母がしてくれた。私と勤叔父は年が六つしか違わなかったもので、何ごとによらずよく競い合い、負けそうになった私は祖母に助けを求めて甘えたことが懐かしい。

その勤叔父が、夏休みの宿題に出た数学の問題について教えてくれたことがあった。休み明け、学校に持っていくと、先生が「柳井さん、これ、誰に教わったの」と驚き顔で言われたので、叔父はよほど頭がいいのだなと思ったことだ。

だが、今思えば胃癌だったのではないかと思うのだけれど、叔父は身体が弱く、夏休み

などに帰ってきててもほとんど働かないで、近所のおじさんと将棋ばかりしていた。そのため、父はよく怒っていた。叔父はきつと何をするにも億劫だったのだろうと思う。

私が実科高等女学校二年生の二学期、十一月のこと。大学生だった叔父が寄宿舎に尋ねてきて、〃柳井澄子が帰りましたら、田町のおばあさん（この人は、早く妻に死別した万作じいさんのお妾で、津山は田町の台所付き一間の長屋に住み、質素な暮らしをしていた。柳井家では叔父たちを次々に津山に出すのに、そこを下宿代わりにさせるつもりだったらしい）宅に来るよう伝えてほしい〃との伝言を残していた。運動選手だった私は、放課後も残って練習していて、寄宿舎にはまだ帰っていなかったのだ。

折も折、翌日岡山への遠征が予定されていたのに、父から送られてくるはずのお金が届かず困っていた時だったので、その日すぐに田町へ飛んでいった。勤叔父は〃おこた〃でじつとしていた。私はお金を借りることばかり考えていて、やつとのことと、お金を貸してほしいと言うと、叔父は、お父さんには自分がここに帰っていることは言わないでほしい、と言った。「言わない、言わない」と言って、私はお金を借りて帰った。寄宿舎に帰ってみると、父からお金が届いていたので、すぐにとつて返し、叔父に借りたお金を返したのだが、その時も、お父さんに自分がここにいないことは言わないよう、念を押された。私は、休みでもないのに帰ってきていたから、叱られるのが嫌で言わないでほしいと言ったのだろう、くらいに簡単に考えていた。

岡山から帰り、勤叔父さんともつとゆつくり話そうと思って、田町に行ってみると、おばあさんが、その日の朝、叔父にとつては一番上の姉、奥津円周寺のつぎ伯母さんの所に行つたと言うので、私は安心して帰つた。しかし、叔父は覚悟を決めて帰つてきていたのだということを、私は後で知ることになる。

勤叔父は、つぎ伯母さんの所へは行つておらず、それ以来消息不明となつた。当時、三原山心中や大磯心中など飛び込み自殺が頻発していたころなので、健康に不安のあつた叔父は苦悩のうちに自殺したのだと、私は思っている。

頭のよかつた叔父には少し左翼的なところもあつたし、どこか外国にでも行つていて、いつの日かきつと出世して帰ってくるにちがいないと、祖母は死ぬまで信じていた。だが、結局何も手掛かりはなく、今ではお墓を建てて弟が守をしている。

女学生の日々

実科高等女学校に入学後は、放課後、中村先生という目の見えない先生にお琴を習っていた。だが、なかなか憶えられなくて困っていた。そんな矢先、体操の古佐先生に運動選手になるよう勧められた。小中学時代、苦田郡の六ヶ村（奥津・羽出・泉・久内・富・上齋）競技にはよく出ていたが、津山に出てみると、そんな比ではなかった。

でも、先生は、柳井さんは見込みがあると言って、ボールスロー（当時、競技種目の中

にあった。バレーボールのようなボールを砲丸投げのように投げ、飛距離を競うもの）をすることになった。

当初、一〇分程しか投げられず、田淵さんという人と、毎日毎日、降っても照つても放課後はひたすら投げていた。岡田さんや安東さんという人たちはよく走るすばらしい選手だったが、そんな人たちでも、いつも津高の人には負けていた。しかし、先生たち、山下先生、園芸の先生、和田先生、地理・歴史の先生、校長先生、いろいろな先生方が、「柳井さん、頑張れよ」と言つて応援してくださり、毎日真つ黒になつて練習した結果、三年生の春、津高の人に勝つことができた。日の丸の旗が上がり、「君が代」が流れ、校歌が流れたときには涙が出て止まらなかった。

校歌は、次のような歌詞だった。

一 古城のほとり 千早振る 並木の松の深みどり

匂ふもゆかし 我が母校ここに若き日恵まれて

燃ゆる希望に 目覚めたる乙女の身こそ嬉しけれ

二 とこ麗しき 奈義の嶺を 学びの庭に仰ぎつつ

みなと楽しく 過ごせてふ 美園も近しさあれども

あだなる花に憧れて空しき栄は夢追はず

三 見よ苦田野に啼く田鶴のその音は高し我が理想

羽搏たば雲を凌ぐらむ力を清き誇りにて
撓まず倦まず一筋に正しき道を進まなむ

四 ああ吹く風も香はしき文読む窓の深みどり

操の光身にしめて日に改まる日の本の

乙女ぞ我らいざ共に磨けよこころ鍊れよわざ

この時、初めて、私は、嬉しくても涙が出るのだな、と思った。同時に、降ろうが照ろうが練習に明け暮れていても、けっこう勉強も人について行けるものだということが分かった。

国語の荒内という先生は風紀係で、毎朝、朝礼に際して男と女の話の話を繰り返されていた。私は、女ばかりの学校で「なぜ」と不思議に思っていたが、それには理由があった。実科高等女学校の上に衆楽公園があり、当時、そこには男子の商業学校があつて、実際にいろいろな問題が起こっていたからだ。私に運動を勧めてくださった古佐先生は、「他の人たちとは違い、運動選手は質実剛健であらねばならない」と常に言っておられた。私は先生の

教えを守り、日々勉強と運動に励んだ。余談だけれど、古佐先生は、美しい着物とグリーンの袴がよく似合うハイカラな音楽の河本先生と仲が良かったのを憶えている。

夏休みになり、家に帰る時、私はお土産を買って帰るのが常だった。家族にはもちろんだが、私の守をしてくれたおばあさんや長屋の人たちにも買って帰った。長屋には、小さいころ、*「守り子」*のおばあさんに連れられ、よく行っていたからだ。私のお土産をみんなが喜んでくれるのが嬉しかった。長屋の人たちも、兎や鳥が獲れると、*「澄ちゃんに」*と言って届けてくれたのを憶えている。

夏休みが終わって学校に戻るときは、ちよつと気恥ずかしかったけれど、みんなで門のところまで私を見送りに出てくれた。みんなに可愛がられ、優しくしてもらって幸せだった。ただ、幼いころ、叱られる私を庇ってくれた妹は、長屋の人たちと馴染みがなく、親しくしているのを見たことがない。

私の生まれた柳井の家は、村では分限者⁶と言われた。だが、分限者といっても、今に比べれば質素な暮らしだった。おじいさんなど、お汁がこぼれると、*「あれ勿体ない！」*と四つん這いになって吸っていた姿が今も目に浮かぶ。私も、そのような姿を見て育ったから、シャツ一枚買うにも、人が五〇銭のを買うところ、三〇銭ので堪えていた。

⁶ 金持ち。もの持ち。

それまで、家にいる間はお金など持ったこともなかった。せきばあさんが「こつつみ袋⁷」を縫ってくれたのにお米（当時、白米一升三〇銭）を入れてもらい、一個一銭の棒菓子や豆板を、時々「買いに行く」くらいのことだった。

第一、間食といえば普段は栗を煎ったものや「げす柿」（渋い柿。今では鳥の餌になるか、腐って落ちるのが通り相場だろう。今はみなお金を出して西條柿や富有柿など高級品を買って食べるが）を干し柿にしたものだった。「げす柿」は、まず傘の骨に刺して若年様のところに飾るのをこしらえ、その後は「つるし柿」を二〇も三〇も作って「おやつ」にした（だが、これとても、柳井の家が山や庭を持つていたからできたことなのだが）。だから、一銭でも始末しようという思いが強かった。

そのころは、鼻をかむにも新聞紙（新聞をとっている家も稀だった）を使っていたが、一度鼻をかんで使った紙を囲炉裏のそばに並べて干し、二度くらいは使っていた。また、缶に水を汲んで囲炉裏のそばに置いておき、「熾き」ができれば、缶の水に浸けて消し炭を

⁷ 小布をはぎ合わせたお米を入れる袋。

⁸ 黒砂糖を固めたような菓子。

こしらえたものだ。

胎教のせい？

お医者さんの娘の甲田さんは別嬪さんのうえ、今で言う高級品を身につけるので、ますます美しく、私は、相も変わらず、安物ばかりを着た骨太の田舎娘のままだった。

私が生まれるとき、母にとっては初めての子供だったので男の子を産もうと、胎教のために、納戸（寝間）の枕元に西郷隆盛の絵を掛けて朝晩拝んでいたら、西郷さんのように太って四角い赤ん坊（私）が生まれたのだという。そして、柳井の井戸が澄むようにと、澄子と名づけられた。そんな私は「天真爛漫」だとか「天然」だとか揶揄されることが多く、それはまた自認するところでもあるけれど、私は、自分の境涯を、自分なりに懸命に生きてきただけだ。

その後、妹（昌子）が生まれてくるときには、母は昭憲皇太后の御影を拝んでいたとい、妹は別嬪さんに生まれついている（私と昌子の間に久子という女の子が生まれたが、生後間もなく肺炎で死亡）。

女の子が三人続いた後、弟で長男の道弘が四月に生まれる。昔、上齋は四月でもまだ雪があつたが、そんな季節なのに、囲炉裏端に茸が生えたのだ。そのため、弟は神様の授かり子だということになり、たいへんなことになったらしい。そこで、道を弘めるようにと、道弘

と名づけられた。道弘は、親の言うことにはどんなことでも口答えをしたことがなかった。

当時長男は家の「大将」だったから、家族はみんな夢おろそかにはしなかった。そのため道弘はますます神様の子のようになっていった。おじいさんなどは、ご飯を食べる時、自分の傍に座らせ、魚が付いた日には自分は食べずに丁寧以身を取って道弘の皿に入れてやるのだ。道弘の次に生まれた弟の正道が、横合いからそれを取ると、おじいさんは怖い顔をして正道の手を箸先で叩く。そんな様子が今も目に浮かんでくる。

そんな道弘が、その後、家を出て、正道が柳井家を継ぐことになったのは皮肉だなあ…と思う。

次に三人目の弟、保男が生まれ、さらに智子という目のぱつちりとした美人の妹が生まれた。智子が生まれるに際し、母は、日ごと、「萬龍」という美しい芸者の写真を見ていたという。末っ子の美智子の時は九条武子の絵を見ていたそうで、これまた美人。末っ子にして美人ときているから、たいへん可愛がられようだったらしいが、実科高等女学校の生徒だった私は津山に出ていて、その辺の様子はあまり知らない。

寄宿舎の仲良しに、富の森さん、久田の正体さん、甲田さんが



図2 芸者 萬龍

いる。そのころ、私がよく頭に瘡をこしらえていたのを、森さんが「柳井さん、臭いなあ」と言つて洗つてくれたものだ。しかし、森さんは早くに亡くなつてしまった。

柳井の波ちゃんも私の部屋によくやつて来ていた。勉強のできる人だったが、その後リュウマチに罹り、手や足が痛むと苦しんでいた。彼女は田淵博保という人を婿養子にもらい、家庭を築いたものの、男の子と女の子の二人の子どもを残して早々に亡くなつてしまった。代々郵便局長の家柄だったけれど、今は息子さんが跡を継ぎ、波ちゃんにとつての孫もできて立派に生活しておられる。東京に嫁いだ娘さんのお嬢さんも近ごろ結婚されたと聞く。波ちゃんが生きていたら、どんなにか喜ぶだろうにと時々思う。

親類筋にあたる藤木のいくちゃんが同室になったときには、日曜日になると、河野医院へ「行こう、行こう」と言うので、よく行つた。そこには「磐さん」という美人画の上手な男の子がいて、よく描いてくれたものだ。後にその人は東光会の役員になられ、津山でも時々個展を開いておられた。一度見せてもらったことがあるが、とても立派な絵だった。日曜ごとにあまりに頻繁に河野医院へ出かけるので、友だちが「牛（いくちゃん）に引かれて善光寺参りだね、柳井さんは」と言つて笑つた。

四年は瞬く間に過ぎていった。

四年生にもなると、ほとんどの人が初潮を迎えていたのに、私には訪れがなかった。だが、そんなことには無頓着で毎日毎日運動に明け暮れていたため、色が黒く、眉毛が薄いうえに、安全剃刀で顔剃りをしていて眉を半分剃り落としてしまうようなことも一度ならずあった。

服も安い物ばかり着ていたので、眼もあてられない状態だったのだろう。ある日、家庭科と寄宿舎担当の、東先生という女子大出の立派な先生に「柳井さん、もう少しおしやれしたら」と言われてしまった。なり振るかまわず運動ばかりして過ごした四年間だった。

そんな晩熟の私にも、四年生が終わるころ、初潮が訪れ、寄宿舎のおばさんやみんなが赤飯を炊いて祝ってくれた。ちよつと顔の赤らむ懐かしい思い出である。

津山実科高等学校卒業後は、東京の学校（今の大学）に行けば先生になることができ、小さい時から先生に憧れていたこともあって、行きたいと言えば行かせてもらえる環境にはあった。でも、先生というのは、何でも知っていなければならず、また着物一枚を一時間で縫い上げなければならぬなど、それはそれはいへんだということを知り、

先生になることは諦めた。専攻科に進むことにして、春休み、上齋に帰った。

外堀を埋められて

ある日、枝木樵りに母について山に行った。昼になって山から戻り、「ああ腹がへった」と家に入りかけたら、母が「澄ちゃん、ちよつと待って。その風呂場に隠れてなさい」と言うのだ。不思議に思いつつ隠れていたけれど、一向に「出てきてもいいよ」とは言ってくれないし、腹が減るので、「お母さん、まだ」と言つて風呂場から出ていくと、囲炉裏の上座に知らないおばさんが坐っている。その人は私の顔を見るなり、よそ行きの顔に飛びつきりの愛想笑いをしながら「まあまあ学校から休みで帰っていなさるのに、よく働きなさるなあ」と言われる。後でわかったことだが、その人は後に私の夫となる牧野松寿の叔母さんで、寺が原という所の石原という家に嫁入りしている人だった。その人の親が、私を自分の孫の嫁に迎えたいというので、話を持ってきていたらしい。

牧野松寿は、岡山の農学校を卒業。岡山農業試験場を出て農業技術員となり、上齋原の役場に就職して村長の父のもとで働いていた人だった。

当時、役場は柳井の土地（現在、柳井の畠になっている場所）に建っていた。建物の前には手押しポンプで汲み上げる井戸があり、近くの人バケツをさげて飲み水を汲みにやって来ては井戸端会議をしていた。その役場の二、三軒先に郵便局があり、その次あたりに牧

野の家はあつたけれど、松寿という人を私は全然知らなかった。六つも年齢が違ふし、今のように男の子と一緒に遊ぶということもなかったのだ、見も知らぬ人だった。

「おばさん」は、その人の嫁に私をと話を持ってきた、つまりは仲介人だったのだ。私を褒めに褒めて帰られた後、母が「今の人が澄ちゃんをお嫁にくれと言つてこられたのよ」と言うので、びつくりして「お嫁になんか絶対に行かない」と応え、春休みの終わつた学校に戻つた。

夏休みが来て家に帰り、いつものように家の仕事やひえ抜きを手伝つて日々を過ごし、翌日学校に戻るという前の晩、二階に來客があつた。その來客が歸られたと思つたら、祖母と母が「澄ちゃん、ちよつとおいで」と言われるので、行つてみると、本膳（高膳）の上に立派な鯛がのつていた。そして「これは、澄ちゃんをお嫁にほしいと言つて持つてこられたものだよ」と言う。驚いた私は「嫁には行かんで」と言つて泣き、明くる日学校に出た。

父は、行かんでもよいと言つていたが、祖母は可愛い孫を近くの家嫁にやり、自分が時々行つて話をしたりお酒をよばれたりしたいものだ、と思つていたらしい。

母は母で、勸銀の副頭取にまでなつた優叔父が京都の酒屋のお嬢さんを嫁にとり、次の商大を出た智叔父が津山の松本という金物屋に婿入りしていたことなどから、交際がたいへんだつたらしいのだ。そのため、同じ百姓家に私を嫁がせれば少しは樂なのと、私は人

間がいいので老後を見てもらえと思ったようだ。祖母と母の二人は本気でいたらしい。

二学期も十一月になったころ、親が学校に連絡したとので、岡山の伯母のところに行くようにと言われ、津山から汽車に乗せられた。岡山に行くと、伯母は「京都に行つて一週間ほど遊んでんちゃい」と言い、私を再び汽車に乗せた。私の学校時代は満州事變のころで、修学旅行などというものはなく、京都も奈良も歴史で習っただけ。岡山の先へは行ったこともなかった。見るのも聞くのも何もかもが初めてだった。

京都駅には叔父が迎えに出てくれていた。私は知らなかったが、両親や伯母や叔父の間で連携ができていたのだ。

優叔父の家では、叔父の伴侶である「叔母さん」に初めて会った。叔母さんは生まれも京都なら育ちも京都という生粋の京都人で、私の話す「上齋弁」は何も分らないらしく、ホホホと笑われるばかりだったので、叔父が仲を取り持ち、通訳してくれた。

明くる日からは忙しかった。まず、宝塚に連れていつてもらった。まるで夢の国に行つて遊んでいるような気がした。昔から、悪いことをしたら地獄に、良いことをしたら極楽浄土に行くのだと年寄りに教えられてきたが、これがこの世の極楽かと思つたものだ。

翌日は高雄で紅葉狩り。上齋とは比べものにならないような、見たことのない紅葉の美しさに目を見張った。

次の日は、叔母さんの実家に案内された。出かける前、叔父は私に心得を説いて、「澄子、あつちの家に着いたら、まず玄関で挨拶をするのだけれど、兄嫁が出てきて長い長い挨拶をするから、これ以上ないような最敬礼をするようにな」と言った。

山科の「伏見の酒屋」の住まいってどんなところだろうと思っていたが、津山の河野所の比ではなかった。長い土塀の続く大名屋敷のようだった。叔父に言われたとおり最敬礼して挨拶し頭を上げると、相手はまだ頭を上げていないので、二、三度は屈み直さなければならなかった。

さらに驚いたのは、その挨拶を受けてする叔母さんの挨拶も、氣候の挨拶から始まり、まるで手紙文のようだった。

次の間に通され、しばらく待っていると、白髪の老女が入ってきて手をついて、「これはこれはお常はん（叔母さんの名前）、ようおいやしたな」と言い、叔母さんもまた「お母上、お久しゅう」と言って、まるで他人様にするように、京都弁で長い長い挨拶をするのだった。私なら、「お母さん、来たよ」と上がっていくのに……と思っていた。

案内されて奥の間に入ると、黒光りのする大きなピアノが置いてあった。私が小学校で音楽を習った時はオルガンで、津山の女学校に出て初めてピアノを見たが、そのピアノよりずっと大きかった。ひどく大きな黒い物体が居座っているような印象だった。

叔母さんのお母さんが、ちょうど今しがた、高島屋から孫の振り袖が届いたから、と言っ

て見せてくださった振り袖は、それはそれは立派な品物で、どんなお姫様がお住まいかと思っただけだ。

そうこうするうちに渡り廊下の向こうから、二、三人の人によつて捧げられた高膳が運ばれてきた。その時出された料理がどんな物だったか何も憶えていない。ただ、足が痺れるので早く帰りたいなあと思つていた。

叔母さんは、私が嫁に行くのを叔父から聞き、実家の人たちに話していたことを後で知つた。そして、今なら相当すると思われるダイヤの指輪をいただいて帰つた。

夢のような一週間だったけれど、ある日「澄子、帰らねば。お父さん、お母さんが津山に出て、箆笥などを買つて待っているからな」と叔父に言われ、叔母さんの振り袖の着物を持たせられ汽車に乘せられてしまった。

津山に着くと、両親が駅に迎えに来ていて、学校になにもかも置いたまま上齋に連れて歸られた。それが十一月十一日ごろだったと思う。

上齋に歸つた翌日、奥津から来てもらった髪結いさんに、髪を桃割れに結ってもらい（昔、娘たちは髪を長く伸ばし、三つ編みにしていた。その長い自分の髪で文金高島田に結ってもらつてお嫁に行くのが普通だった）、妹や弟たちと縄跳びをして遊んだ。それを囲炉裏にあたつて見ていた土佐巡査（駐在所も役場のそばにあつて、柳井の土地に建っていたので、

よく来ておられたのだ」が、母に「あんな無邪気な娘をお嫁にやるのか」と言つて、私のために泣いてくださったそうだ。

かつて、嫁入りに際しての近所や親類縁者からの祝いはお金ではなく、ほとんどが絹やモスの布だった。それらの布を縫いに来てくれていた柳井の梅ちゃん（別嬪さんで頭の良いい、私より一級上の親類の人。分家の夫より一つ下の孝兄さんに十八歳で嫁入りしていた）が一言、「澄ちゃん、お嫁に行ったら初夜は痛いものだよ」と言われたのが頭に残っている。

嫁入りにまつわる話として思い出すことがいくつかある。

弟の道弘と同級生で後に義弟となる牧野修三は、夏休みなどよく遊びに来ていた。母が一度「修ちゃん、家の澄ちゃんをお嫁にあげるから可愛がつてな」と言ったら、「おばさん、それは卵と『スーメ』で大切にするよ」と言つた。その時、家には「スーメ」⁹の木がなかったのだ、ちよつと心が動いた。母は「修ちゃん、褒める褒める。酒屋さんの娘も局長さんの娘も断つて澄ちゃんであらねばつて、カルピスを澄ちゃんに持つて来てくれたんだよ」と言つていた。

また、勧銀に勤める優叔父が、お盆で墓参りに帰省していた時のこと。二人してタクシーで藤木校長先生の家に行く途中、後ろ姿の男の人を見て、叔父が「澄子、あれがおまえの

⁹ 日本の在来種のスモモ。

婿さんになる人だ。ええがなあ」と言ったのが記憶にある。

そんな夏のある日、母が「呉服屋さんが来て丸帯を買ったから見なさい」と言った。私が「嫁になんか行かんからいらん」と応えると、岡山から来ていた従姉妹の房ちゃんが「澄ちゃんがいらんのなら私がもらう」と言ったので、「あんたにあげる」と言っで見向きもしなかった。

私がいくら「嫁には行かん」と言っても、話は着々と進んでいたらしい。それはそうだろう。今思うと、すでに結納もとり交わしてしまっていたのだから。

だが、結婚というと、美しい花園で小林秀恒の絵（彼の絵が好きだった）に描かれたような、美しい男と女が蝶々のように優雅に舞っている姿を想像するばかりで、私には現実の結婚というのが頭になかったのだ。

昭和七年五月七日、『大磯心中』（坂田山心中）という心中事件¹⁰が起る。この事件は、後に映画化され、「今宵名残りの三日月



図3 小林秀恒作

¹⁰ 「大磯駅にほど近い小丘、通称坂田山の松林の中で、若い男女が服毒死しているのが発見された。慶応

も消えてさびしい相模灘、死んで楽しい天国で貴男の妻になりますわ」というフレーズが人口に膾炙した。

まだ十七歳の夢多い年頃だった私には、性的関係をもち、子どもをこしらえるような結婚はとうてい考えられなかった。プラトニックな恋に憧れていた。

結婚そして結婚生活

牧野松寿と私の結婚式は昭和八年十一月十四日、みぞれ交じりの雨が降る寒い寒い日だった。親類の人が大勢来ていた。

当時、花嫁は文金高島田に綿帽子を被ったり角隠しをしたりしたが、私は文金高島田に立派な三叉の筭(こうがい)を挿した(三叉の筭は、上齋で持っていたのは私だけだったので、後にお嫁に行く人が貸りに来られることがあった)。

大学理財科三年生調所五郎(二四歳)と静岡県素封家の四女湯山八重子(二二歳)であった。八重子が芝白金頌栄高女に在学中、ふたりは知り合った。彼女が主演する聖劇は五郎が演出するなど、似合いのふたりだった。女学校卒業帰郷の後も交際は続き、五郎の卒業を待って結婚する日を待ちわびていた。しかし八重子に縁談が持ち込まれ、家族はこの方を勧め外出も許されなくなるに及んで、ふたりはかつてよく散歩した美しい思い出の坂田山で待ち合わせ、天国へと旅立ったのだった。この事件は、五郎と並べて仮埋葬された八重子の死体が盗み出されるという事態を迎えたが、十一日朝大磯海岸砂中から発見された。その死体が処女のままだったということに人びとは感動し、「ふたりの恋は清かった、神様だけが御存知よ」と歌にまで歌われた」平凡社刊『別冊 太陽』昭和五四年三月。

母が「澄ちゃん、日和が悪いから留め袖の方にしなさい」と言っただけで、「振り袖を着ないようならお嫁に行かない」と私は駄々を捏ねた。母は仕方なく振り袖を着せ、「明日帰ってきたらよいから、とにかく行つて」と言つた。

嫁入り道具は、私の知らぬ間に牧野家の蔵に運び入れてあつた。長持ち二棹、桐の箆筒、整理箆筒、蒲団（絹・モス）、座蒲団、鹽、衣桁等々。着物は大きな桐の箆筒と整理箆筒にぎつしり詰めてあつた。

先方からは、分家の叔父、叔母になる人、牧野先生夫妻が迎えにきてくださった。婚家は二、三軒先なので、振袖の両袂を二人の人にそれぞれ持つてもらい、後ろから裾を持つてもらつて、「バンザイ、バンザイ」の声に送り出され、冷たい雨の中を両親や伯母たちにつれられて行つた。

牧野の家の奥の間の縁から上がり、式をしていたら、母が膝に抱いていた一番下の妹美智子が「お姉ちゃん、足が痺れるんだつて」と言つたので、三三九度の杯を早々に切り上げたという。私はまったく憶えていない。

弟の道弘たちがゾロゾロついて来ていた。そして、障子に穴を開け、式の様子を見ながら、お姉ちゃんを取られたと思つて泣いた、という。ずいぶん後になつてから道弘が話してくれた。当時は、お嫁さんが来たら、隣近所の子どもたちが、どんなお嫁さんかと見に

行く習慣があり、唾をつけた指で障子に穴を開け、代わる代わる中を覗いたものだった。

式の後、私一人を納戸に入れ、みんな帰っていった。夜、お姑さん（二、三軒先に住んでいたのに全然知らなかった。四十何歳かなのに腰が屈んでいた）が蒲団を敷きに来て、木綿布団を一つ敷き、「澄さん、寝んさい」と言って出ていかれた。

母は私に、普段はモスの方を敷くよう言っていたのに、私の分がない。どうしようかと思っていたら、夫になった人、婿さんが部屋に入ってきた。

その人が寝間着に着替えるのを見ていたら、牛の喉から引っぱり出したようなネルの寝間着を着るではないか。いっぺんに血が逆しに流れた。

堪えて私は「私の蒲団がない」と言った。

すると、倉に入れてあるから明日出す。だから今晚はこれに寝るようにと行って、こちらに顔を向けた。「ニキビ」がいっぱい出ていて、その顔を見たたん、再び体中の血が逆流した。この時初めて、血が逆さに流れることがあるのだと思った。

そのころ、私には一年くらい「月のもの」が無かったのに、結婚式の当日になって「生理」が訪れた。これについては母が先方に伝えておいてくれたらしく、その夜は何事も起こらなかった。

母が「何も心配せんでよいから、牧野の人たちと仲良くするようにね」と言っていたの

を憶えていたけれど、明日になったら帰ってきててもよいとも言っていたのを思い出し、安心して寝た。

ぐっすり寝入ってしまい、朝起きてみると、「あづつて、あどさかし」に寝ていて、出所が分からないうえ、高島田はペシャンコになっていた。いったいここは何処だろうと、しばらく考えて、「ああそうだった。昨日お嫁に来たのだった」と気がついた。見ると、まだ誰も起きていないので、走って柳井に帰った。

帰って家にいたら、お姑さんが「澄さんは来ていないでしょうか」と迎えに来られたが、その日は柳井の洋館の二階で写真を撮ることになっていたので、松寿さんに来てもらうよう頼んだ。

松寿がやって来て、一緒に写真を撮る段になり、横に並んだ時、私が「そばに寄らないで」と声を荒げたため、私たちの新婚写真は離れて写っている。後々まで、夫はそのことを愚痴っていた。

牧野に戻っても、朝、目が覚めると柳井に帰り、晩まで柳井で過ごし、晩になると祖母が送ってくれた。

牧野では、曾祖父が分限者の娘を嫁にほしいというので無理矢理もらったのだからと、とにかく大事に大事にされた。少し早く起きて、ご飯を炊こうとカマドのそばに行けば、「澄

さん、そんなことしなくてよいからあたつておれ」と言われ、掃除をしようと思うと、「冷たいから、澄さんに掃除をさせてはならぬ。タメヨ（姑さんの名前）、何をしておる。澄さんが拭き掃除しているではないか」という曾祖父の声が飛んで来た。

一事が万事この調子で、八時ごろ夫が勤めに出た後、一人で納戸にいと、曾祖母が栗と干し柿を「めんこ」¹¹に入れて持つて来て、「澄さん、これ食べんさい」と言つて置いていく。私はいよいよ何もすることがなく、毎日柳井に帰つていた。

一週間ほどすると、生理も終わり、私は初めて夫に抱かれた。梅ちゃんが言つたようなことはなく、夫は優しくかつた（後で聞いた話では、孝兄さんは新婚当時童貞だつたが、夫は十九か二十歳の学校を卒業したころ、酒屋の息子で可愛がつてくれていた先輩に遊郭に連れられて行つたことがあるらしく、女の扱いが上手なのだそうだ）。しかし、一度血が逆さに流れるとなかなか直らないもので、夫の顔を見るときさえ疎ましく、義弟の修ちゃんとはばかり話していた。

私が嫁いだ牧野の家は、曾祖父、曾祖母、舅、姑、義妹、義弟、夫、そして、私を入れて八人家族だつた。義弟の修ちゃんも弟の道弘と同級生で、よく家に遊びに来ていたから、

¹¹ 曲げ物の弁当箱。

家族の中で、私の見知っている人はこの人だけだったのだ。

夫は時々、津山に出張した。出かける時、「土産に何か買ってきてやろうか」と言っても、私は、「何も要りません」。「着物でも」と言えば、「着物はいつぱいあるから要りません」。「ほんなら、お金を」と言えば、「お金もありますから要りません」と、応えていた。取り付く島がないとは、このようなことを言うのだろう。とにかく、夫がそばにいることが癪にさわるのだから、自分でも始末に負えなかった。その後も、柳井通いは止まなかった。

十二月、出雲大社へ新婚旅行に行くことになった。そのころ、人形仙には「けもの道」しかなく、津山回りで汽車に乗って行った。汽車の中では、夫がそばに坐るので、またしても、学校の友だちにでも会ったら恥ずかしいという気持ちがいっぱいで、離れて坐った。駅に着くと、今度は大社まで一人ずつ人力車に乗って行くのだが、これがまた恥ずかしくて恥ずかしくて、景色も何も目に入らなかった。旅館は、美保関の明神館に泊まった。夜、どこか行きたいところはないか、尋ねられたので、「カフェに行きたい」と答えた。なぜなら、女学校時代、津山にカフェができ、エプロンをしたきれいな女の人が出入りにしているのをよく見かけたので、一度、店の中に入ってみたかったからだ。そこで、「女中さん」に「カフェに連れていってもらいたい」と頼み、案内してもらった。店に入ると、きれいな女の人四、五人が夫を取り囲んでしまつて、私はわきでベソをかく羽目になった。

そんな私を見た件の女中さんが気を利かして宿に連れて帰ってくれた。宿で一人泣いていたら、女中さんが夫を迎えに行ってくれた。そんなこんなで、景色も何も印象に残ったものはない。

帰ると、再び柳井通いが始まった。とにかく家に帰りたい一心だったけれど、母がこしらえてくれたたくさんの嫁入り荷物が蔵の中に入っている。苦は火事で、火災に遭った時、蔵に入れておけば焼けないで済むので、貴重品は全部蔵に入れてある。それらの荷物をどうして持つて帰ろうか。下にも置かないほど大事にしているのに、帰ったら罰が当たらないだろうか。出戻った姉がいるということになったら、後々弟や妹の出世の邪魔にならないだろうか等々、繰り返し繰り返し思い悩んでいたら、とうとう帰ることもならず、年月を重ねてしまった。

今でこそすぐに離婚するし、それがまたできもするけれど、私たちの時代は「一度家を出たら二度と家の敷居は跨ぐな」という時代だった。後になって、妹が「お姉ちゃん、戻るなら荷物なんか放つといて戻ればいいんだ」と言ったのには、ああそうか、そういうことなのか、と感心してしまった。頭のええもんは違うなあ、と思つたのを憶えている。

昭和八年に結婚し、明けて九年、あまりに柳井にばかり帰るので、親たちは、二人きり

にしたら、と思つたらしい。今の、国民宿舎“いつき”の前の車庫になつてゐる場所は、昔は田んぼで農場があり、種牛を二、三頭、鶏や兎など百羽くらい、村で飼つていた。そこに六畳一間の“家”があり、土間には竈があつて煮炊きができた。そこに二人で住まわせられ、牛や鶏などの世話をする事になった。

が、相変わらず、朝になれば柳井に行き、夜になつて祖母や母に送られて戻るという生活をしていた。

私を嫁に迎える時、夫は酒も煙草も止めていたが、私が毎日毎日出ていくので、このころから時々飲みに出かけるようになった。

上齋は冬になると雪がたくさん積もる。昔は、私たちの住む小屋のような小さな家から細い道がついていた。夫は、その細い田の間の道を、柳井に帰る私のために毎日毎日雪掻きをしてくれていた。そんな夫に、どうして非情なことをし続けられたのだろうか、今思えば不思議でならない。

そのころ私は妊娠しており、それでも毎日雪道を歩いて柳井に通つていた。毎日毎日雪道を歩いたせいとか何かよく分からないが、四月も半ばを過ぎて、長男周徳が生まれた。早産だった。小さな小さな男の子で“徳利”くらいの大ききさしかなく、“炬燵”の上で、家族みんなによつて大切に大切に育てられることとなる。私はまたまた男の子を産んだという

ので、いよいよ大事にされた。

子どもが生まれても、私の柳井通いは止まなかった。周囲は、他村に出たら少しは変わるのではないかと考えたらしい。昭和十年四月、夫は芳野村役場に転勤し、現在の鏡野町寺元の道のそばにあった坂手という人の空き家を借りて住むことになった。農業技術員の夫は古川の役場まで自転車通勤した。

柳井にこそ帰らなくはなつたが、夫が出勤すると、周徳を背負って遊びに出た。ちよつと上に飲み屋があり、その家の守り子と毎日遊んでいたのだ。夫は放つぽらかし。お人が見えれば、料理屋から出前を取った。夜になると、夫はタクシーで津山のカフェに連れて行ってくれた。若いころ夫の彼女だったという美しい人がいた。私は彼女についての話を聞いても別段何とも思わなかった。ただ美しい人だな、と思っただけだった。

周徳に続いて年子で次の子を妊娠していた私は、余計に何もしなかったのと、ほとんど家事をした経験がなく、何も分からなかったところに、私よりひとつ年下の円周寺の従姉妹が遊びに来て、一週間ばかり家事をしてくれたことがあった。帰った従姉妹が伯母さんに「澄ちゃんはどうして夫に何もしてあげないのだろう」と言っって不思議がついてたという。この従姉妹も学校の先生に嫁ぎ、幸せそうだったのに、自殺されたとか聞いた。伯母もあまり何も言わない人なので事情は知らないけれど、あんなに人によくするいい人

がどうしてなんだろう、と訝しく思っている。

十一月になつて女の子が生まれた。柳井の母は、祖父母や私の下にいた弟や妹たちの世話で出られなかったため、牧野のお姑さんが来てくださっていた。女の子は「ツル子」と名付けた。鼻の高い美しい子だった。

だが、美しいツル子は、宮参りのころ、あの世に旅立った。一月の寒い寒い日だった。最後に「あんあん」と言った声が今も耳の底に残っている。その時、姑さんは周徳を連れて上齋に帰っていて、私が一人、ツル子を見守っていた。息が絶えてから夫に電話し、「息をせんようになつた」と言うと、飛んで帰り、一緒に車で上齋に連れて帰った。

昔から小さい子どもの葬式はしないものだといふので、ほんの内輪の者だけで穴を掘つて埋め、石をひとつ置いた。そして、夫に仕事があるので、そのまま一緒に寺元の借家にとつて返した。ツル子のいない家は空虚だった。

間もなく、また私は妊娠し、二、三軒下の、かつて学校の校長をしていた椋代という人の家（百姓家）で、空き家になつていたところに移った。大きな広い家で、後ろに墓場があり、大木が茂つていて、前庭には築山や井戸があった。すぐ前にも同じく椋代さんという家があり、百姓仕事に熱心なおじいさんとおばあさん、そして娘さんばかりの長女に婿取

りをした家族が住んでいた。みんなとても優しい人たちだった。

この時は、柳井の祖母が来てくれた。周徳は上齋で見てくれていたので、大きな腹をして祖母と暮らし、よく前の家に行つては遊んでいたが、十二月、寿夫が生まれた。この時は産婆さんを頼んだ。

子どもが生まれると、私はその子の守りをしていればよかった。米、味噌、醤油等々は全部牧野から送られてくるし、お金は夫が入用なだけくれたので、何の屈託もなく過ごしていた。

一年が過ぎたころ、古川に出た。もと旅館をしていた建物が私たちの住まいになった。裏に二階家があり渡り廊下で繋がっていて、後ろは竹藪。玄関のところに帳場があつて、奥の間、居間、台所へと続いていた。古川神社が近く、振り売りの八百屋さんには子どもが六人ほどいた。前は井場のお百姓が二軒。お宮のそばに岡田という建設業を営んでいる人がいて、その人がよく川を干していたので、八百屋の娘と一緒に رفتては魚取りをして遊んだ。

昭和十四年三月、春まだ浅く薄ら寒い日だった。私は女の子(ヤエ子)を産んだ。産婆さんが間に合わず、そばにいた夫が「ちよつと待て」と言つて本を広げ、「何センチのところで臍の緒を切るのかが分からない」と、ページを繰つては唸つていた。その間の長いこと。

私は寒くて寒くて震えていた。ようやく産婆さんが到着し、温かい湯を浴びさせてもらって、ホッとしたことも今では懐かしい。

だが、その前年（昭和十三年）十二月に、柳井の祖母、せきばあさんが亡くなっていた。私によくしてくれた祖母の、見舞いにも葬式にも行くことができなかったのは、何としても心残りで哀しいことだった。

そんなこんなで、母も出て来られず、自分たちだけのお産に、夫はほんとうによくしてくれた。それなのに、その時は少しの感謝の気持ちも湧かず、その後も遊びほうけていた。夫が亡くなってから、しみじみ“よくしてくれたなあ”と、尽くすことのなかった若い日を“すまない”気持ちで思い出している。

ヤエ子の宮参りもまだ先の四月、転勤した夫を追って津山に出た。夫は昭和十三年暮れ、津山市農会に勤めるようになり、古川から通いながら家を探していた。そして津山市山下（当時は男子校の下で、現在は文化ホールになっているあたり）に居を定めた。隣は巡査上がりの夫とその妻、もう一方の隣には商業学校校長の親子四人が住んでいた。

津高に入学した正道を二階に下宿させ、私は寿夫とヤエ子を連れて都会生活をする事になった。上齋やそれまでの所と違い、そこは暑くて暑くて、まるで地獄のような気がした。アイスクャンデーを一日十本程も食べていたと思う。

ところが、八月になって腰と足が痛み始めた。産後に出る病だろうと思って赤堀病院へ行った。病院で、腰と足とどちらが痛いかな尋ねられ、腰の方だと言うと、注射を打たれた。翌日、腰の痛みはとれたが、足が立たなくなり、病院にも行けないので、林田の親類の皮膚科の医師、河野先生に注射をしてもらっていたけれど、痛みは一向によくならなかった。柳井の母は祖父の病気で出て来られず、妹の昌子が来てくれたが、娘盛りであまり役に立たなかった。仕方なく、寿夫を上齋に預け、義妹のタチちゃんに出て来てもらった。タチちゃんは、私が牧野に嫁ぎ、上齋にいた間、私の身のまわりの世話をしてくれていたし、よく周徳の世話もしてくれていたので、ヤエ子の世話を頼み、私自身のことにも頼んだのだった。

先生は毎日往診してくださったが、まったく快方に向かう気配はなかった。注射をしてもらって、痛みについては氷で冷やすだけ。有効な治療法は見つからなかった。後に、初めから外科にかかっていればよかったのに、と言われたが遅かった。ひと月間、毎日毎日疼き続け、ようやく痛みがおさまりかけたと思ったら、歩けなくなった。

柳井の祖父の危篤の報に、上齋に帰った際、三朝に岡山大学の病院があることを聞き、タチちゃんに付き添ってもらって、ヤエ子を連れて三朝の病院に入院した。十一月だったと思う。しかし、ここでも内科にかかったことから、一ヶ月ほどしても少しもよくならず、途方にくれていたところ、外科の先生が、一度足を曲げてみてあげようと言って、麻酔をか

けて曲げてくださった。それ以後、毎日、機械で九〇度まで曲げていたが、あまりの痛さに堪えかねて、最後にもう一度曲げてやろうと言われたのを断り、ようやく痛みのとれた四月ごろ退院した。

帰って、津山市北町の洋館に住み、弟の保男と妹の智子の世話をしていたところ、牧野の義理の祖父、與惣治が亡くなったという報せが飛び込んできた。私を孫の嫁にと奔走し、誰よりも私を可愛がってくれた義祖父。孫の松寿が可愛かったのだろうが、米でも野菜でも味噌でも何でも「送ってやれ」と言い通し、終いまで送り続けてくれた人だった。

その日（昭和十六年四月十日）、祖父は電線を直すため「かぜや」（門屋）の屋根に上り、滑り落ちて人事不省となり、同じ日の午後十一時ごろに亡くなったという。葬儀を済ませて帰る道すがら、私は、働きに働いた祖父の、七八年の生涯を思った。

私たちはそれから、智叔父が婿養子に入った松本家（金物商）の小田中にあつた別荘に移った。私は足を悪くしてしまっていたので、保男や智子たちもお寺に下宿することになり、夫と私、そしてヤエ子の三人で広い家に住むことになった。そこに、牧野の貞子叔母が嫁いだ先の姑さんの孫（牧田仁子という娘）が津高に入学したので世話してほしいと頼まれ、一間に置くことになった。

それまでに二、三度転居し、魚町の二階にちよつと住んでいたときなどは、エプロン姿

を気にも止めず、平気で買い物に出かけていたのに、小田中に移つてみると、隣は商業学校の校長、その隣が郡是製糸工場の所長、そのまた隣が銀行の頭取、さらに隣が検事さん宅とお偉方が隣組で、挨拶に行けば、きちんとエプロンをはずして出てこられる。環境とこのはえらいものだ。勉強させてもらった。

小田中では、検事さん宅にヤエ子と同一年の娘さんがおられたのでよく遊びに行つたし、三丁目には松本の叔父夫婦がいたので、ヤエ子をつれて毎日のように遊びに行つたものだ。

夫の妹、タチちゃんが道弘の世話で結婚したのは昭和十八年五月のことである。道弘が京都中学で出会つた、十歳以上年上の富田典伸（貧乏寺の次男坊で、小さいときから知恩院に預けられていたが、苦学して後に教員となる）という人物を紹介したのだ。

タチちゃんは、一時、上齋で代用教員になって小学校の子どもたちに裁縫を教えたこともあり、周徳や寿夫の面倒もよく見てくれていたので、お寺さんに向いている、ということだった。肋膜炎を患つたりして婚期の遅れていたタチちゃんは、当時二六歳だったが、話ほとんどん拍子に進み、典伸の伊勢の実家で結婚式が行われることになって、父親の雅治さんと叔母さんがタチちゃんを連れて行つた。母親のタメヨさんは腰が曲がついているとい

う理由で行かなかった。

私は町に行けるタチちゃんが羨ましかった。それなのに、義父の雅治は「澄さんは地家^{じげ}で高神の位があるのに、タチ子等は冷や飯食いだ」とよく言っていた。¹²

昔は、百姓をしてたくさん物を持っているところに嫁いだら一生安楽に暮らせると思っていたのだ。今では、年金もたくさんもらえる月給取りが一番らしいけれど。

二人は、京都市左京区の岡崎に小さい一間を借り、机代わりの石炭箱一つ、茶碗と箸が二つずつの、何もないところからスタートしたと、後でタチちゃんが言っていた。だが、そんなことは親にも言えず、二人で苦労して生活を築き上げていったという。夏休みにはい^{やまんだに}つも二人で上齋に来て、慣れないのに典伸は姑について山谷に草取りに行っていた。

そのころ、満鉄に入っていた夫の弟、私を「卵とスーメで大切にする」と言ってくれたあの義弟の修三さんが召集で帰郷し、徴兵検査を受けたものの、身体が悪いとかで返されていた。こんなことでは田舎におれないというので、少しの間だったが、小田中の私たち方で、ヤエ子の守りをしながら、悶々の日を送っていた。だが、戦況の悪化で、間もな

¹² 生まれた土地に居られること。

く兵隊にとられ、昭和十九年十二月二三日、比島サンフェルナンド北方五哩（マイル）方面において戦死したという。フィリピン島に上陸寸前、輸送船が撃沈され、乗船していた者は全員死亡したとの報が入ったのは、敗戦後の昭和二十一年七月二二日だった。二四歳の若さで戦死してしまった義弟の顔が今も目に浮かぶ。

肺病（結核）が流行したのも、昭和十八年ごろだった。当時、肺病は死に病だと言われ、伝染するので肺病を患う人のそばには近寄らないと言われていたが、女学校三年生になっていた妹の智子が発病した。上齋に帰って家で療養していたので、私はよく行って見てやっていた。牧野では、病気が移るから子どもは連れて行かないようやかましく言われた。

私たちは小田中の別荘をひき払い、西村という旅館に一間を借りた夫を津山に残し、私はヤエ子を連れて上齋に引き上げていた。

戦時中の食糧難の時代だったが、戦争に勝つことばかり考え、常会で岩端谷の山を開墾して甘藷を植えに行った。戦争に勝ったら、今度はここにチューリップを植えて花畑にするのだという希望を誰もが持つて働いていた。それなのに、次第に、米を作っても全部供出しなければなくなっていくた。

百姓をしても米が食べられなくなったので、“めんこ”（これに入れたご飯は美味しかった）にジャガイモを入れて山谷に行き、小さい段々田んぼに生えた草を来る日も来

る日も姑と二人で腰を屈めて取った。

その季節になると、お蚕が出る。姑は腰が曲がついて蚕棚の上げ下ろしが辛いらしく、私に大姑と一緒に蚕を飼ってくれと頼んだ。自分はいえ、毎日ジャガイモの弁当を持って一日中、山谷の草取りに行っていて、終いには「足が立たんような」と、こぼしていた。

私は、そんな時でも実家が近いって、父が可愛がつてくれたので、珍しい物が手に入りさえすれば「澄子、澄子」と呼んでくれて、食べさせてもらっていた。母でさえも「お父さんは澄子ばかり可愛がつて」とよく怒っていた。

夫は日曜日には津山から帰ってきたが、すぐに出なければならぬので、家の百姓仕事を手伝うことはなかった。

昭和十九年四月三日、とうとう夫に、教育召集のため中部第48部隊に陸軍二等兵として入隊するよう赤紙が来た。章夫が腹の中にいて臨月だった。もう子どもはできないと思っていたが、上齋に帰ってすぐに妊娠した（上の子どもたちを宿した時、悪阻はなかったのに、章夫を妊娠した時に初めて悪阻を経験した）。

結核を患っていた妹の智子は、美しいうえにますます顔が白く透き通って、悲しいまでに美しくなっていた。五月という、ちょうど田植え前で忙しく、みんな仕事に出てしま

うので、智子は柳井の家の奥の間の「おこた」にあたつて留守番をしていた。が、病には勝てず、五月二五日、十七歳で生娘のまま亡くなった。

よほど苦しかったのだろう、「先生、早く殺して」と言つたのが最後のことばになった。「智ちゃん、そんなこと言うものではないよ」と私は言つたが、聞こえたかどうか。

そのころはまだ土葬が風習で、座棺が普通だったが、智子は寝させ棺で埋葬された。今までに見たこともないような、それはそれは美しい死に顔だった。「瑞泉院翠雲智光大姉」が柳井家四女、私の妹智子の戒名である。

今のようない機械がない時代、しかも手袋や靴があるでもなく、素手、素足で苗床を作る時の冷たさ、氷の張っている田で代を掻く辛さは、今思い出しても、身体の芯に冷たさが染み入るようだ。それでもみんな朝は朝星、夜は夜星をいただいて、夜に日を継いで働いた。苗床作りや代掻きが済むと、赤飯を炊いて祝う。赤飯を食べるのが何よりの楽しみだった。次に待っているのは、水田に肥やしを入れる作業。来る日も来る日も「まや肥」（牛小屋の肥）を「肥籠」に入れて背負つて行き、固くなっているのを手でほぐしながら、田んぼの中にまんべんなく広げるのだが、これがまた大変だった。

春のこのころには、ウドやワラビが出るので、みんなして山に行く。でも私は百姓仕事で忙しくて行くことができない。羨ましく思っていた時、一度、母が連れて行ってくれた

ことがあつた。遠い奥山に分け入って探したが、収穫はわずかだった。母は、牧野の家の人に悪いと言つて、自分のものまで私の荷の中に入れて持たせて帰すので、初めは山に行つて遊べるくらいに思つていたけれど、こんなことなら行かなくてもよいわと思つて、山に行くのを止めた。

“まや肥”を入れた田には、さらに山に行つて葉刈りしてきた草を入れた。そして、六月は田植え。雨が降れば“ぼうりよう”（蓑）を着て編み笠を被つて出るが、首筋から雨が入り、寒くて冷たくて手は“こじける”、苗は取れず、悲しい思いをした。縄を引いて植えるので早い人はすぐに植え終わるのに、下手な私はおくれを取り、無念だった。

柳井の田には、“奥”¹³から何十人もの人に来て、一日か二日で田植えを済ませてしまうのに、私の嫁入り先の牧野では、あちこちに散らばった田んぼの田植えを、一週間くらい続けた。でも、田植えの時には四回ご飯が食べられた。ご飯には塩鯖の煮たのが一つ付く。“こびりま”¹⁴には、ぼた餅か混ぜご飯が出るのがうれしかった。梅雨入りした上齋の六月は寒い日が多く、疲れた日には“ああ、今、田の中で倒れたら休めるのに”と思うこともしばしばだったが、わぎとはできないものである。

¹³ 上齋原の地区の一つ。本村より奥の地域。
¹⁴ 小昼間。

田植えが済めば、〃しろみて〃（代満）といって一日休んだ。休んだ後は田の草取りと養蚕の日々がやって来る。

案じていた夫は、その年（昭和十九年）の七月二日、除隊となつて帰つてきた。岡山にいて、たった三ヶ月でも夫を兵隊に取られるのはさびしく悲しいのに、長い間戦地に赴いている兵士の家族はどんな思いでいるのだろうかと思うと、切なかつた。

七月十五日には、木治の上の方でお大師講があり、お護摩が焚かれる。このお大師講には行かせてもらえた。私は姑が着物を着て団扇を持つて嬉々として出かける姿を初めて見た。その時の姑の嬉しそうな姿が今も目に残っている。

着る物も、思い起こせば、昔は股引（ももひき）といって、男のズボン下のようなものをはいていた。冬の間に機で織つた木綿布を紺色に染めてから縫うのだけれど、股のところが開くように作つた。その股引をはいてお腰（腰巻）をして着物を着る。それをはいていれば、便でも小水でも排泄するのに便利なのだ。昔の人は、歩く等している時に途中で尿意や便意を催した際には堪えて、田でも山でも自分の土地に行つてするように言つたものである。

ある日、二、三人の人を頼んで一緒に田の草取りをしていた時のこと。作業の早い私が

前へ前へ進んでいたら、後ろで大笑いする声が聞こえる。手を止めて「何がそんなにかかしいん」と聞くと、「澄ちゃん、あんたお尻がまる見えだ」と言つて、さらに大声で笑われた。端折った裾の下の股引がわれて、私のお尻がまる見えになつていたのだ。顔から火が出そうだった。

ズロースやパンツ、ショーツのない時代には、丁字帯（所謂女性用褌）も晒（さらし）で縫つた。いつのことだったか、買い物に行くために歩いていたら、白くて長い布が足許でヒラヒラしているのが見えた。丁字帯がずつてぶら下がつていたのを知らずに歩いていたらしい。その時は誰も見ていなかったので急いで始末したが、危うく恥ずかしい思いをするところだった。

夏は朝四時に起き、お茶漬けを一杯食べて草刈りに出る。刈つた草を車で引いて帰り、温い朝ご飯を食べてから田の草取りや養蚕をし、夜は夜なべにボロつぎをした。洗濯物は灰で洗う。夜、小川に持つて出て、足で踏み洗いをしたものだ。

子どもも、男の子は山谷に牛を五頭も六頭も追うて行つてから学校に行く。

そのころ、布を継いで蒲団の覆いにしていたが、ノミがいつぱいいて、ノミの糞ですぐに真っ黒になった。着物にもノミがたくさんいて、毎朝取るのが一苦労だった。

また、家の中で牛を飼っているので、夏は、ご飯の上にハエが真っ黒になるほどたかつ

た。追えども追えどもすぐにやって来てたかる。氣にしているはご飯も食べられないので、手で追いながら食べた。

夏も終わりに近づくと、稲をくくる「いいぞ」を三〇〇〇も四〇〇〇も作っておかなければならない。雨降りの日や夜ごと夜なべでせつせと作った。

稲も、もちろん鎌を持つて手で刈る。一日に三〇〇束ほど刈ることができればよい方だった。それを「はれば」^(ママ)¹⁵に懸けて、月が出るまで働いた。

屋敷

昔、上齋のほとんどの家は百姓を生業にしていたので、建物への入口はくぐり戸になっていた。敷居の高くぐり戸は人間がやっと通れるくらいで、脇には風呂があり、便所があった。牛が出入りするときは大戸を開ける。土間は人間と牛が出入りするので広かった。柳井の家は東向きで、門のところに一間あり、小学五年の時に習った難波先生が下宿しておられ、ご飯は家に食べに来ておられた。片側には長屋があり、牛小屋と作業場があった。門を通り抜け、ちよつと坂を上がると、馬小屋が一つあり、風呂場と便所が並んでいて、その前は広い「かど」だった。

¹⁵ 「羽出場」のこと。

家の中は、三和土の右に板の間があり、板の間に上がるところに長い下駄箱のある八畳ほどの上がり框があった。上にあがると、六畳くらいの中の間、その奥に八畳ぐらいの、床の間が設えられた奥の間があった。そこには神棚があり仏壇があった。奥庭は簀戸で仕切ってあって「まや」が三つあり、人間と牛とが同居していた。

牛は専ら農耕に使っていて、春、田を耕す時に使いものにならないようでは困るので、一所懸命飼った。餌には溜めて乾かしておいた蚕の糞や糠などを与える。水はいちいちバケツに汲んでいって一頭ずつにやるのだけれど、一頭が二杯も三杯も飲むので、たいへんだった。

板の間の続きに四枚の簀戸があり、簀戸を開けると真ん中に囲炉裏のある八畳ほどの部屋があった。そこに大きな木の戸棚があって、竈（くど）が二つ、ご飯を炊くのお汁を煮るのがあった。当然ながら、ご飯は鉄の羽釜で、お汁は鉄鍋で煮炊きした。戸は全部木でできていたが、煤けて真っ黒になっていた。

さらにその奥は「うちおえ」¹⁶で六畳、その奥が六畳ほどの納戸で、蒲団や衣類を入れる「押し入れ」が付いていて、夫婦（または新婚夫婦）の部屋になっていたけれど、そのころの納戸は光の入らない、暗くてじめじめした部屋だった。

¹⁶ 内御上。接客用の部屋のこと。

裏には縁があり、庭には池があつて鯉や「はえご」が泳いでいた。そして表の蔵と裏の蔵とがあり、その上には畠があつて、さらにその続きに水車小屋があつた。その水車小屋では、二、三軒で、米を搗いて白米にしたり、団子の粉を作ったりしていた。これらすべてが柳井の屋敷だつた。敷地内には柿の木や梨の木もあつて、夏には蟬がミンミンと鳴いていた。子どものころはそれをよく素手で取つたものだ。

戦中から戦後にかけて、京都の優叔父の義叔母と子どもが奥の間に疎開してきていた。田舎に住んでいても、米はほとんど供出してしまうので、食糧難だつた時代、着物と米を換えてあげることもあつた。義叔母は京都の酒屋の娘で生粋の京都人だからか、蒲団を敷くにもちゃんと坐つて敷くのがたいそう珍しく思えた。

柳井家の長男 弟の道弘は、戦時中、岡山の連隊に入隊していた。ある時、上官につれられて絵画展に行つたらしい。その時に見た絵のあまりの素晴らしさに魅了され、その絵を描いた人に会つてみたいと言つたところ、会うことが叶つたという。道弘はその絵の作者を伴侶に迎えたいとして写真を送つてきた。弟の看病などで忙しくしていた母に代わつて写真を見た父と私は気に入る、絵の作者であつた女性（愛子）を道弘の嫁に迎えることになつた。

戦時中のこととて、彼女は岡山からボストンバック一つを提げてやつて来た。嫁入り衣

装は全部私ので間に合った。盃が済み、披露宴もたけなわになったころ、空襲警報が鳴り響いた。明かりを落とし真つ暗にした中で警報解除を待ったことが、今に至るまで心に残っている。この道弘の嫁は岡山の師範学校を出た教師だったので、しばらく上齋の学校に勤めていた。

昭和二〇年三月三日、夫が臨時召集され、中部第48部隊に入隊。歩兵第四七七聯隊第六中隊に所属、出勤。今度は九州方面に行った。そして、六月十日には陸軍一等兵になっている。八月一五日、その日はちょうど泉の貞子義叔母の夫、森安守さんがお盆の線香を立てに来てくれていて、大姑が食べることをしていた。あとの者はみんな仕事に出ていて、私がかいにあつた玉澤屋という店に買い物に行ったら、ラジオで「日本国民のため、私をのんで戦争は止めた」と昭和天皇の声での放送をしていた。

夫は昭和二〇年八月二九日、召集解除となり、シラミをいっぱい持って帰って来た。着ていたものに煮え湯をかけてシラミを殺し、足で踏んで洗濯した。夫は「九州は雨の多い所だった」と言ったきり、何を尋ねても口を開こうとしなかった。何かよほど言い難い経験をしたのだろう。次々に戦死する人がいるなか、生きて還ってきてくれただけで有り難

いことだと感謝した。

引き揚げてきた昌子

戦争も終わり、どれくらい経ったころだったか、津山駅前で食堂を経営していた母方の親類から「今、まこちゃんが満州から引き揚げてきているから早く来て」という報せがあった。飛んで行つて見ると、上齋にいた時のハイカラ娘とは信じられないくらい変わり果てていた。髪はじゃん切り、汚れて真っ黒になった手拭いで向こう鉢巻きをして、労務者の着る「なつぽ服」に地下足袋をはいた姿で、二歳ぐらいの小さな女の子を抱いている。そばにいた五歳ぐらいの男の子は目ばかり大きく見開き、四歳ぐらいの女の子はいやに腹ばかり膨れた全くの栄養失調状態。夫、これは作業服に下駄を履いて、バケツの小さいのを一つ提げており、この世の者とも思えないような様子。見るなり涙が出て涙が出て仕方がなかった。

すぐさま上齋に帰ると言うので、一緒に連れて帰った。自動車の中で、子どもたちに話しかけると、怯えたような顔をして私を見るばかりだった。すると、妹が「お姉ちゃん、この子らはこんなに親切にしてもらったことがないからびっくりしているのよ」と言う。私たちの想像も及ばないような苦勞をして引き揚げてきたのだろう。

妹もあまり詳しくは話さないで分らなかったが、後に藤原てい（夫は作家、気象学

者の新田次郎。敗戦時、新田は新京（長春）の気象台に勤務していた」という人が、三人の子どもを連れて満州から引き揚げてきたときの様子を小説（『流れる星は生きている』）にしたものを読んで、妹に尋ねたら、そのとおりだと言っていた。昼は人に子どもを預けて働き、夜は爆弾が目の前で炸裂する中をかくぐつての逃避行。三人の子どもを連れてほんとうによく帰って来たものだ。どんなにか苦しく辛い日々だったろうと思うと、私の胸は潰れるようだった。

家ではライスカレーを作って待っていたが、小さい子どもたちが二杯も三杯も食べたのには驚いた。よほどお腹が空いていたのだろう。

長男だった妹の夫は、職にありついたら呼び寄せるからと、昌子と子どもたちを上齋において、新潟の実家に帰っていった。

妹の昌子は、女学校時代は「エス」¹⁷だった。女学校を出ると、母の妹がいた朝鮮に一人で行ったり、東京のドレスメーカー女学院に通ったりしていた。東京では、煙草を吸い、大学生と議論を交わすような生活をしていたらしく、私などの想像も及ばないような娘時代を過ごしたようだ。

す。¹⁷ sister の頭文字からきた隠語。少女同士、あるいは女教師などとの強い絆、または現実の交友関係を表す。

上齋に帰った昌子は肋膜炎を発症。療養しながら、小説家になるのだと毎日毎日洋館の二階で何やら書いてぶらぶらしていた。

その後、奥津から満州に行っていた岡本というピアノ教師に、新潟出身で満州の気象台に勤める人を紹介され、結婚することになった。結婚に際しても、昌子一人が仲人に連れられて行っただけで、私たちの考えるような結婚式はなかった。妹は私たちとは違っていて、どこか別の世界の人のような気がしたものだ。一度帰郷した時、百姓していれば要らないからと、私のいい着物をたくさん持たせたこともあった。

母の妹で朝鮮に行っていた叔母の長男は、上齋の家で働きながらではあったが、柳井の父が津山の中学校に行かせてやっていた。その叔母も朝鮮から親子二人で引き揚げてきた。叔母夫婦といえども遠慮があったのだろう。毎日黙々と働いていたのを思い出す。教員をして結構な暮らしをしていた人でも、敗戦後は家族四人が六畳一間に住み、ツルハシを握って労働しなければ生きていけない時代だった。間もなく、叔母の家族は揃って大阪に移っていった。無一物から再出発し、その後はお金も残して子どもたちもそれぞれ立派になった。もはや叔母夫婦とともに鬼籍に入ってしまったが、人生の終盤を安楽に暮らしていたのが救いである。

このころ、家には道弘の嫁もあり、百姓をしていても米は全部取り上げられ、配給制な

ので食べる物の“せんばり合い”¹⁸が起こり、まるで生き地獄のようだった。

昌子のさらなる受難

昌子たち母子四人は、一冬いて、迎えに来た夫とともに新潟へ帰って行った。これで安心と思っていたが、新潟は新潟で義理の弟妹も多く、両親は月給取りのところに食糧難ときているので、後から聞いた話では、昌子は毎日毎日車を引いて行商に出ていたらしい。娘時代のことを思えば想像もできないような苦勞をしたらしく、再び子どもたちを連れて上齋に帰ってきた。六畳ほどの部屋が一間あったので、そこで母子四人が寝起きし、妹は毎日毎日百姓の手伝いをしたり、植林の手伝いをして子どもたちを養っていた。今思えば食糧事情も悪く、致し方ないにしても、父が私ばかり可愛がり、妹の昌子には割合辛く当たっていたのが何ともやりきれない。

そうこうするうち、昌子の夫の森上が迎えにやって来た。その時、昌子はどんな思いだったのか、子どもだけ新潟に帰し、自分は上齋に残った。新潟に戻っても苦しいばかりなので、自分に残って働き、仕送りした方がよいと考えたのではないかと私は思っている。それからは前にも増して働いて働いて、正月前、自分で儲けたお金で、子どもの綿入れ着物三人分自分で縫い、冬仕度に入り用の品を揃えて新潟に送った。すると、それらの品を森

¹⁸ 争って取り合えること。

上が送り返してきたのだ。ちょうど私が柳井に行っていた時で、忘れもしない、中の間で荷物を解いた妹が、黙ってぽろぽろと大粒の涙を流していたのを、昨日のこのように思い出す。そのころから妹は変になっていった。

昭和二二年、夫が上齋原村長選挙に立候補した。対立候補は宮崎忠夫という人だったが、夫が当選。四月十日、村長に就任した。その夜、村の人たちが集まって祝ってくれていた席で、ある人から夫に女があつて女の子が生まれていることを聞いた。びっくりしたけれど怒りの感情は湧かなかった。驚いただけだった。

その後、一度、相手の女性に確かめに行ったことがある。その女性には夫の子どもではないと言ったが、最終的に夫はその子を認知し、山だったか畑だったかをその子の名義に換えていた（それを知ったのもずいぶん後のことだった）。

村長に就任した夫は、毎日のようにやって来る進駐軍の応対に加え、奥の者と本村の者との間にあつた学校の立地問題が紛糾するなか、劇務をこなし奮闘していたが、結局4年の任期を待たず、昭和二三年十二月六日辞任する。

夫が村長として奮闘していた昭和二二年七月、四男信行が生まれた。悪阻がひどく、子どもは要らないと思ったほどだった。その日の朝も草刈りに出かけていて、出血したので母に来てもらった。お産は軽く、出を合わせたようにお大師様の日に生まれたので、母は

何か因縁めいたものを感じたらしく、神様の授かり子だと言って喜んでくれた。

弟保男のこと

三高に入っていた弟、三男の保男が二年生の時、身体を壊して上齋に戻り、療養していたが、昭和二十四年十二月十七日、帰らぬ人となった。

保男は小さいときはよく鼻を垂らしていて、みんなから「鼻垂れの兄ちゃん」と呼ばれていた。小学校に上がってから教室で小水を漏らすことがしばしばで、その度に母は始末をしに学校に出向いていたが、津高に入ってから努力して三高に進むまでになった。みんなが「やはり努力次第で何でもできるものだ」と感心していたのに、病気になってしまい、食糧事情の悪い時代でもあったので家に帰って来ざるをえなくなった。帰郷した弟は、毎日黙々と百姓の手伝いをする一方、村の子どもたちを集めて勉強や運動を教えていた。弟の病は腎臓結核だった。冬を前に、江原病院に入院していた弟は、その日の夜、「紅萌ゆる岡の花 早緑匂う岸の色 都の花に嘯けば 月こそかかれ吉田山」（「逍遙の歌」と、三高の寮歌を歌い終わって息絶えたという。二三歳の若さだった。

智子が亡くなり、昌子は気が振れ、今また保男は逝ってしまう。親にとって子どもに先立たれることほど辛い悲しいものはないというが、この時の私は、父、母の堪え難い悲しみを頭で理解はしても、子の親の、身を切られるような深い悲しみを、自分のものとして

実感してはいなかった。母は、幾度鳥取の海に入って自殺してしまおうと思ったことかと、ずいぶん後になっても哀しそうに話していた。

昌子精神を病む

保男が亡くなり、その日は近所の人が葬儀のために手伝いに来てくれていた。それなのに妹は黙って俯いて、時々は笑ったりしながら廊下を行ったり来たりしている。「まこちゃん、どうしたん」と聞いても、黙って同じことを繰り返していた。

夫の森上さんは義弟の葬式に来たついでに昌子をつれて帰るつもりで上齋に来ていた。

だが、夫が近づいて話そうとすると、一言もものを言わず逃げってしまう。父が自分の隠居部屋にと作っていた総檜造りの新館に昌子がいるというので森上さんが行けば、母屋の中の間に飛んで帰る。とにかくものを言わないで逃げ回るばかりで、森上さんは昌子をつれ帰ることができなかった。

ある夜には、「お姉ちゃん、お姉ちゃん」と戸を叩くので起きてみると、出刃包丁を懷に入れて「今、ロスケが観音様の下の所まで攻めてきているから役場に連絡して半鐘をたたいてもらって」と言う。「まこちゃん、どうしたん。そんなもん来るわけないよ」と、柳井に連れて帰ったら、母が「今、飛び出していったので、心配していたところだった」と言うので、「昌子はおかしくなってしまうたのかもしれない」と言うと、「うちにはこんな気

の狂ったような者はおらんのに」と心配げな様子で母は言った。

みんなが心配していたら今度は夜中に「昌子が人形仙（当時は、山また山を越して鳥取県に出る細い獣道が通っていただけ）の方面に向かつて出ていつてしまった」と言つて来たので、分家の孝兄さんと夫が探しに出た。妹は「木地山」という所まで行つていたという。

母は妹を病院につれて行き入院させた。

その後、入退院を繰り返していたが、病院を出てからは、父の隠居部屋に父母と一緒に寝起きするようになった。妹は普段からあまりものを言わないたちだったが、一日中黙りこくつて、煙草を吸い、三度の食事をとつては寝てばかりいた。

一度、子どもたちのうち娘二人が訪ねてきたことがあつた。妹の喜びようはひととおりではなかつた。

妹家族は満州から引き揚げる際、たくさんを着物を現地に残してきていた。妹は「あの着物さえあれば、お米や食べ物に換えてもらえたのに」と思い返しては嘆いていたが、その後、母が一枚二枚と作つてやつていた着物を、この時全部持たせて帰した。これが娘たちへの昌子の形見となつた。

柳井の道弘夫婦が上齋に戻るのを機に、妹は高見病院に入院した。新潟から長男の和史と娘の綾がやつて来たときもたいそう喜んで、それはそれは嬉しそうにしていた。でも、

子どもたちが「また来るね」と言うと、「お金が要るからいいよ」と言う。私が「まこちゃん、ええがな。また来てもらえば」と言っても、「来んていいよ、来んていいよ」と、優しい眼で子どもたちに言っている姿がいじらしく、私は涙を堪えるのに苦労した。

昭和六一年も暮れになって、妹が膵臓癌にかかっていることを医師から告げられる。

明けて正月、昌子の長男和史夫婦、それに絢親子四人が昌子に会いにやって来た。みんな立派になっていた。

昭和六三年五月、上齋の祭りの日だったが、道弘、正道、末の妹美智子、そして私とが見舞いに行った。「暑いよう、暑いよう」と言い言いして、たいへん苦しそうにコーヒーのようなものを吐いた。

四、五日後の夜八時ごろ、昌子の容体が急変したという知らせを受け大急ぎで駆けつけたが、到着した時には息を引き取っていた。

戦争さえなければ、こんなに辛く悲しい人生を送らなくて済んだのにと考えると、やりきれなかった。

三男を養子に

京都の義妹タチ子夫婦に子ができないので、三男章夫を小学校に入る前に養子にやるという話が持ちあがり、毎日毎日返答を迫られた。私が返事をしないでいたら、ある日、縁側

で信行に乳を飲ませている私のところに姑がやって来て「ぶすぶす子どもを産むくせにタチ子に章夫の一人もやれないのか。タチ子の所に子にやれば教育してもらえて大学にも行かせてもらえるのに」と言う。それを聞いた私はどんなに悔しく情けなかったことか。それ以後、姑の言うことが鬼のように思え、好きになれなかった。姑の親類のおばさんが来た時、「澄ちゃん、姑さんはいい人だけど、大姑さんが言わせてるんだから」と言つて聞かせてくれたが、一度心についた傷はなかなか治らなかった。

我が子が可愛いのは誰でもみんな同じだ。誰が養子になどやりたいものか。でも、家にいて百姓するよりも勉強をさせてもらえ、大学にも行かせてもらえるのならと、何度も何度も自分に言いきかせ承諾した。夏のある日、私の三男章夫は義妹夫婦に連れられて京都に行ってしまった。

連れて行かれはしたものの、私の子どもだから会おうと思えばいつでも会えるだろうと簡単に考えていたが、全然違った。毎年夏休みに入ると、義妹夫婦に連れられてやって来たが、私が章夫を連れて柳井に行こうとすると行かせまいとする。とにかく私のすることはすべて「田舎の伯母さん」のすること、外に連れ出すこともさせない。人が、章夫は私の子だと言うのを本人に聞かせたくなかったのかもしれないが、かつて私にもやさしく

接し、子どもたちの世話もよくしてくれた義妹が、と思うと腹が立った。

章夫を京都にやってしばらくの間は、ほんとうに哀しい思いをした。夕方になれば悲しくなり、思い出しては泣いていた。そんなとき、夜の夜中に章夫の声が聞こえてきたような気がした。それで障子を開けて、「ありや、章夫の声がする」と言ったら、「澄さんが狂った」と言われ、明くる日には津山の高見病院に入れられてしまった。私が入られた部屋には女学校の生徒で、夜眠れないのだという器量のいい、もの静かな娘さんがいた。周りの人はほとんどが個室に入れられていて、朝から晩まで「南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏」と称えている人、一日中一人でしゃべっている人、黙って丸くなっている人、中には学校の先生もいた。そこに十日間ほどいて、家に帰った。思い出すだけに悲しい思い出である。

姑のタメヨのこと

姑が亡くなったのは昭和二九年三月二〇日、六九歳だった。姑にとっての一生はとても悲しく苦しいものだったと思う。働いて働いて、働き抜いた人だった。

姑のタメヨさんは川向こうの藤木家から、私と同じ一七歳で牧野家に嫁いできている。父が村長をしていて、昔だったが裁縫学校も出ていた。それなのに、昔のことだから、大百姓に嫁いだからといって裁縫だけしていればよいというものでもなく、むしろ農家の働き手として、何をおいても田畑に出て働くことが求められた。

牧野家には、利口な姑（私からは大姑の満寿^{ます}）がおり、小姑も女三人、男二人がいた。舅は自分の親ばかりがよく、タメヨさんのすることなすことが気に入らないらしい。大きな声で怒ってばかりいた。近所に嫁入りしていた小姑に意地の悪いのがいて、その小姑が毎日毎日やって来てはタメヨさんの悪口を言う。私が嫁いだ時、タメヨさんはまだ四〇代なのに腰が曲がっていた。その曲がった腰をさらに曲げて、明けても暮れても肥籠を負って田の草を取っていたのが目に残っている。

ある日、タメヨさんが山谷へ仕事に行き、昼時になったので小屋で昼食を済ませて休んでいた時、外の木に雷が落ちたことがあった。「まるで電気が走ったようにあった」と、腰を抜かして這うようにして帰ってきたが、間もなくして糖尿病（昔は水やお茶を無茶苦茶に欲しがることから^{カワキ}乾病がついた）と言った）を発病した。

タメヨさんは一年ほど野良に出ず家において、初めて家事の一切を任されたが、野良で働くばかりだったので家事をしたことがなく、家事があまりうまくできなかった。それを、夫である舅は事あるごとに、自分の親のした方がうまいと愚痴るばかりで、タメヨさんを庇うのをついぞ見ることはなかった。

みんなの反対を押し切ってでも行けばよかったのに、京都の娘（タチちゃん）の所へも一

度も行くことなく、人生を終わってしまった。

暮れの出火

昭和三〇年の、暮れも押し詰まった十二月二十九日。雪は降っていないが寒かったが寒い日だった。

前日に餅つきも済ませ、豆腐もその日に作りあげてあった。舅と周徳と寿夫は風呂を焚くときにくべる木の屑を製材所にもらいに行つて運んでいた。あまりに寒かったので風呂を沸かした。寿夫は早く風呂を済ませ、川向こうの叔母の所に餅つきの手伝いに出かけた。みんなが床に入つて寝に就いた二時ごろ、隣の孝兄さんが「火事だあー」と叫んでかどを通り抜け、表に行つた声に驚いてみんな外に飛び出した。見ると火が柱を燃え上り、お正月に使う大豆の殻を並べておいたのに燃え移っていた。舅は寝間着のまま飛び出してきて、家族みんなで井戸の水や風呂の水を一所懸命かけたが、見る見るうちに火は燃え広がってどうすることもできなかった。その時、消防車の来るのがどんなに遅く感じられたことか。

昔は「あまだ」¹⁹に牛の飼料の干し草や藁を夏中働いて全部上げてあったので、燃えるは燃えるはそれはすごい勢いだった。風一つない日だったが、二階だけが端から端まで、奥

19 二階。

の間の上まで真っ直ぐの炎をあげて燃えていった。その有り様を柳井の母と私とヤエ子は裏の蔵の所で茫然と見ていた。

大姑と舅は分家の者が来て連れていんでくれたようだった。小学生だった信行は起きて出てきていなかったが、信行のいないことに気づいた周徳が助け出してくれた。

原因は風呂を焚いたときの灰の不始末にあった。いつもは風呂を焚く前に前日の冷たくなった灰を取り除くのだが、この日風呂を焚いた娘のヤエ子が、焚いた後のその日の灰をいつもの石炭箱に入れたために起こった火事だった。当時は消し炭入れのような缶でできた灰入れではなかったのだ。

火事の後、駐在所に喚ばれ、ヤエ子が未成年だったので夫と三人で行った。ヤエ子がその日の灰を石炭箱に入れたことを認め始末書を書いた。その時、なぜ私は自分の灰の不始末から出た火事だったと言わなかったのか、ひどく後悔した。一生消えることのない思いとなつて今も私の心の奥底に沈んでいる。

もうひとつ、私の心にかかっているのは、周徳の大切にしていた物が全部焼けてしまったことだ。周徳の部屋は二階だったので、押し入れに入れてあったたくさんの本や文学全集、思い出の写真などが残らず焼けてしまい、「自分のものは何もない」と、周徳が時々口

にするのを聞くと、ほんとうに切なくなってしまう。

正月は目前だったが、お蔭で雪ひとつ降らず、毎日お天気で、柳井の母が先頭に立って濡れた物を全部自分の所の畑に干してくれた。村の人たちは牛を飼う藁や干し草を毎日毎日届けてくださった。その時受けた恩は今も忘れていない。私たちも生活がやっとなので金銭的なお返しはできないけれど、村の人たちとの交流は絶やさないよう、私なりの小さな努力を続けている。そしていつか機会があれば少しでもお返ししたいと思う。

それにしても、上ばかり焼け、なぜ下だけ残ったのか、不思議でならない。あるいは大黒柱の下に玉鋼が置かれているからかと、ふと思ったりする。

その年は奥の間で雑煮を祝うだけのお正月をした。

長男の結婚

昭和三三年九月、長男周徳が結婚した。昔、上斎原の小学校に教員で来ていた妹尾という頭のいい女の先生がおられ、その先生の姪だからと柳井の父が話を持ってきた。泉の人でお父さんもとてつて評判のよい人だった。その人の娘ならと、縁談はまとまり、嫁に迎えることになったのだ。

頭のよかつた周徳は津山の高校に行きたがつたが、夫が苦田高校のPTA会長をしていた関係で、苦高に行かせた。嫁に迎えることになった昭子も頭が良く、姉兄は別の学校に進

学したのに、昭子ときは家の事情で苦高に行かざるを得なくなつて、周徳より一年下で、苦高を卒業していた。

昭子も百姓に嫁ごうとは思つていなかったらしく、百姓が「えらい」と言うのと、周徳が黙つてスウィツと立つて行つてしまふ、とよく俳句に詠んでいた（このころ、さわらび会という会に柳井の母、私、昭子、そのほか大勢の人が入会し、小学校教諭の山本先生に俳句を習っていた）。

柳井の母が天理教に夢中になり出し、津山の分教会に十日通つた後、お授けを受けるために奈良の天理に出かけて一月も二月も家を空けるようになった。やがて村人を勧誘しては家の二階に招き、飲ませたり喰わせたり、幾人もの人たちを奈良に連れて行つたりしていた。

そのころ、父が前立腺肥大になつて津山の江原病院に入院した。母は「こんなことになつたのも信心が足りないからだ」と言つて、ますます一所懸命になり、津山の天理教教会に通いつめるようになった。私は仕事が済んだ後、六時ごろのバスで出て父に付いていた。牧野には九五歳の大姑と七六歳の舅、二人の年寄りがいるうえ、嫁には小さな子どもがあつて（昭和三四年九月、周徳夫婦に長女誕生）、一日中父を看ることができなかったため、夜

に通っていたのだが、昭和三五年八月二〇日、父は永眠した。

長い間、村長、森林組合長を務め、私をどんなにか可愛がってくれた父。お酒の好きな父は朝にも昼にも、そして晩にも「どぶろく」を飲んでいたが、暴力ひとつ振るうでもなく、すぐに寝てしまうタイプだった。「人を連れてくるのはいいけれど自分はすぐに寝てしまつて、私にばかり接待させる」と母がよく愚痴っていた。また母は「お父さんは女によく手を出す」とどんなにか怒っていたが、他家に子どもを作ることはなかった。

山をたくさん増やし植林をいっぱいして檜御殿を作った父。臨終の床で「上齋に帰りたい」と言つた父に、帰つてもよいとの主治医の許可が下り、孝兄さん、正道、私が出津し、末の妹美智子も駆けつけた。だが、途中で息が切れたら大変だ、医師のいる所なら安心だと言つて、その夜は病院に留まることにした。母を寝かせ、私に代わつて間もなく、「水がほしい」と父が言う。何よりお酒の好きな父なのでお酒を入れて飲ませると、「これは酒じゃ」と苦しそうに言つた。水を飲ませてあげたら、静かに目をつぶるので眠るのかと思う間もなく「足の先が冷たい」という孝兄さんの声がして、あれよあれよという間に逝つてしまった。道弘も間に合わずじまいだった。看病らしい看病は何もしてあげられなかつ

たが、死に水だけは取らせてもらえてほんとうによかった。

孫息子の誕生と四男の怪我

昭和三六年の年末、牧野家にとつての跡取り息子、周徳夫婦にとつての長男が誕生した。嫁は大きな腹をしていたので、みんな双子ではないかと心配し、石田医師にも来てもらったが、無事に男の子を出産。二〇日は柳井の父の命日だったので、父の生まれ変わりではないかと、ふと思ったりした。舅の雅治も周徳に長男ができたと喜んで、よく背負っては仕事をしていた。

その翌年のいつだったか、ある日のこと、人を頼んで田の草取りをしてもらっていたので、跡取りの孫を背負い、小昼間を持つて歌井の田に行きかけた時、足を滑らせて転倒。田の縁のコンクリートでたたか胸を打った。孫は幸いにも田の中に放り出され怪我はなかったものの、私は一瞬目の前が真っ暗になり、五分ほど意識を失っていた気がする。そのまま死んでしまうかとさえ思った。胸と足が内出血していたこともあり、医者に通って休んでいた。

当時高校一年だった四男の信行が盆花を取りに行くと言って、柳井の伊都岐、知和岐、美佐雄、不二雄等従兄弟たちと下山の方に出かけていったのは、八月十二日のことだったよ

うに思う。信行が原の川べりから落ちて大きな石の間に挟まって動かないという知らせが入った。みんなでふざけて体を突き合わせながら歩いていたらしい。すぐにタクシーを頼んだが、人事不省の信行は体が硬直していて乗せることができず、急遽軽四に藁を敷き、その上に乗せて津山の中央病院に走った。私はまだ先だつての打撲が全快していなかったの
で柳井の母について出てもらった。その時、家族はそれぞれに心のうちで覚悟を決めていたのだろう、死に目に会わせてやりたいから、後からバスで出るようにと私に言つて出ていった。私はもう間に合わないかもしれないと思いながらも、祈るような気持ちで津山に向かった。

病院では額田という立派な先生が治療に当たってくださっていた。看護師の人たちはお盆で休みだったが、看護学校の生徒が二人いて一所懸命氷をとり代えるなどしてくれた。まるで植物人間のような信行を母と二人で看病して一七日目、「梨」と言つて信行に性根がついた時はどんなに嬉しかったか。病院中の人々も我が事のようにそれはそれは喜んでく
ださった。

家では舅や大姑、信行にとっては祖父や曾祖母が裸足参りをしたり、観音堂の法印さんの所に行つて御祈禱を頼むなどしてくれていた。

ところが、その後がまたたいへんだつた。体の大きな信行が突然ベッドの上に立ち上が

るので、それを押さえるのに全力でかからなければならなかったのだ。八月でまだまだ暑かったのと怪我が全快していなかった私は一人ではとても対処しきれなかったと思うが、母が手伝ってくれてほんとうに助かった。

当初、ほとんどのものが言えなかった信行は少しずつことばを取り戻していったけれど、「おしっこ」が言えない。それで夫と二人して信行を岡大の附属病院へつれて行ったら、これが後遺症で今後も「しっこ」は言えないだろうと言われた。帰る道すがら「治らないのなら、山谷の田の中に家を建てて二人で『信』を見てやろう」と夫と二人覚悟を決め、寡黙に帰った。秋にもなるので田が待っていた。当分は信行を入院させておくことにして、私は上齋に戻った。

狂乱の日々

秋の穫り入れなどで、忙しく立ち働いていたある日のこと。舅が「手が痺れるんじや」といつて山谷から帰ってきた。その日は奥津のちか叔母さん（石原という家に嫁いでいた舅の姉妹で、「澄子、わしはたった三円の結納で嫁に行き、苦勞して苦勞して何度大釣の淵に飛び込んでしまおうと思ったか知れない。子どもが可愛いので生きてきたがな」と話していた優しくとてもいい叔母さんだった）が来ていて、ちょうどお昼時だった。舅は膳について箸も箸も持てず、ご飯も喉を通らなかつた。「こりやあ中風じゃ、澄子、石田先生の所

に良い葉があるそうじゃから行ってもらってきてくれ」と言われ、飛んで行つて、もらつてきた葉を飲ませたが、とつてしたほどにはよくならなかつた。とにかく食べたものが喉を通らず、日に日に形相が変わつていった。

その年は十月にヤエ子の結婚が決まつていた。

私たちが小田中にあつた松本の別荘に住んでいた時、隣には商業学校の校長一家が住んでおられた。ヤエ子が高校に進学しようというころ、その校長は津高の校長になつておられ、ヤエ子が勉学優秀だという話を聞いて津高への進学を勧めるため、わざわざ上齋まで来てくださった。ヤエ子は津高に行きたいと泣いたけれど、経済的な問題もあり、校長にはお断りする一方、ヤエ子には「苦高を卒業したら京都のタチ子叔母さんの所に行かせてやるから」と約束して津高を断念させ、苦高に進学させた。

高校を卒業したヤエ子は約束どおり京都に出て住友ベークライトに就職。富田典伸と義妹夫婦の家に下宿して通勤していた。

上齋では頭によさと可愛さで評判のよかつたヤエ子に、さる人から縁談が持ち込まれ、見合いもし、二、三度はデートをしたりもしたが、相性が合わずこちらからお断りするとうようなことも、その間にはあつた。

その後、義弟富田典伸の仏教大学時代の後輩だという人との縁談が持ちあがつた。相手

は黒谷金戒光明寺の塔頭瑞泉院の跡取りで、前住職の父親死亡後は母親と二人で寺を守りながら大学院を修了したという人物だった。富田夫婦はこの縁談に大乘気で、瞬く間に話は進み、結婚の運びとなった。

お金だけは夫が送ったものの、嫁入り衣装から何から何まで富田で準備が整えられた。私は自分の嫁入りの時に母が持たせてくれた着物を染め直して京都に送った。

ただ、この時は信行の怪我それに続く入院と、舅雅治の病気が重なっていて、とても結婚式に出ることなどできないと思っていたが、夕チちゃんがどうしても来るようにと言うので、留守を義姉の孝姉さんに頼み、夫と二人、一泊の泊まりがけで出かけた。結婚式は仏式で行われた。自分の娘ながらその美しさに惚れ惚れした。あの日のヤエ子の花嫁姿はほんとうに美しく、今も眼の奥に焼き付いている。

出雲大社へ新婚旅行に出る二人を京都駅に見送り、その足で上齋へ帰った。早く帰らねば舅が何時どんなことになるやもしれず、飛んで帰った。案の定、孝姉さんには嫌味を言われた。

舅は食べるものが喉を通らないのと、ものが言えないのとで日に日に痩せて憔悴していった。季節は秋の直中で朝から晩まで忙しくしている周徳等の手伝いをしようと思つて出かかると、普段、あれほど仕事仕事と言つていた舅が、「放つとけ。そばにいてくれ」と言う。

不思議なことがあるものだと思ったが、今思えばよほど心細かったのだろう。

中の間に大姑と舅の二人が枕を並べて寝ているので、大姑を別の部屋に移そうとしたら、「ここにおいといってくれ、雅治を看取つてやりたいんじや」と大姑が言つて、舅が亡くなるまで二人は並んで寝ていた。大姑は感情を顔に出すような人でなかっただけ余計に心情憐れに思った。舅は、昭和三八年十一月二三日に息を引き取つた。奇しくも舅の末子修ちゃんも亡くなつたと同じ二三日だった。「わしはおばあさんのように百まで生きるんじや」と言い詰めていたのに、病には勝てなかつた。享年七十九歳であつた。

夫は岡山の食肉（畜産センターか）にいたので、柳井の母には毎日何かと助けてもらった。

大姑は一日の大半を横になつて過ごしていたが、百歳でも性根は確かで一人で便所にも行つていたし、少しも手のかからない人だった。ただ、便が固くなつた時は、嫁の昭子（妊娠十ヶ月の身重だった）に指で出してもらつていた。私はとにかく毎日毎日外の仕事と孫の守に明け暮れていた。

津山の中央病院に入院していた信行が退院して帰り、高校を一年休学していたこともあつ

て、信行にとっては曾祖母の大姑のそばにいた。

明けて三九年三月、周徳夫婦に次男が生まれた。大姑が生まれたばかりの玄孫を見たいというので、昭子が抱いていつて見せると、とても喜んだ。

舅が亡くなった後、親である大姑が遺族年金を受け取れるようにと手続きをしていたが、その遺族年金の給付はまだかまだかと、ひどく心待ちにしている様子だった。幾つになってもお金が欲しいのかなあと不思議だった。その年金が三月二五日ごろに出た。大姑は痩せ細った手で千円札を一枚二枚と数え「昭子にやってくれ」と二千円出し、私には千円くれた。信行は自分にはくれないので「おばあさん、忘れものはないか」と言っただけで、「ない」と言っただけで、残りのお札を枕の下に入れてしまった。

夜はいつも私と信行が大姑のそばに寝ていたが、いつのころからか、大姑はしばしば「起こしてくれ」と言うようになった。初めのころは言うとおりにしていたけれど、起こすたびに体にこたえるようだった。分家の叔父が「あんまり起こさねんで」と言うので、大姑がせがんでも「おばあさん、起きたら余計に苦しいから」と言っただけで起こさないでいた。亡くなる前の日、三月三〇日の夜も「信、起こしてくれ」「起こしてくれ」と言い続けに言っていたのに、亡くなるなどとは考えもせず「起きてはいけない。起きてはいけない」となだめながら起こさなかった。

翌朝、朝ご飯を持っていくと、大姑はよく寝ていた。上の入れ歯が落ちているのにも気づかずあまりによく寝ていたので「昭ちゃん、目が醒めてからご飯あげて。私は山谷に薪木樵りに行くから」と山谷に向かった。その日はたいへんよいお天気で、山には少し雪があつたが、ほんとうに気持ちのよい日和だった。私が薪木樵りをしていたら、昼前、信行が「おばあさんが死んだ」と言つて呼びに来たので、驚いて飛んで帰った。話を聞いてみると、あれからおばあさんは目を醒まさなかつたので、起きてからと思つてご飯をあげないでいたらしい。そこに芳叔父さんが来て、そのまま息を引き取つたのだそうだ。まるで枯木が倒れるように百歳の大往生をきめられた。

私が嫁に来るまでは知らないけれど、来てから見てみると、大姑は武士の妻のごとき人だった。山ひとつ向こうの越畑という所から一七歳で牧野與惣治に嫁ぎ、牧野の本家から分家して間もないかを男三人女三人、計六人の子どもを育てながら、難しい舅、姑に仕えたという。器用な人で何をしても完璧。『非の打ち所がない』とは大姑のような人のことを言うのだろう。

いつも口を真一文字に結び、笑つた顔もあまり見ることはなかつた。何もないところから、子どもが一人でできれば田を一枚買い、夫と二人働きに働いて身代を作り上げ、子どもを嫁にやる時には牛を一頭持たせるまでになった。火事に遭つては狼狽える夫を叱咤しな

がら大切な村の書類を守ったという女丈夫で、端然と座る姿はほんとうに武士の妻かと思うほどだった。おそらく上齋にこんな人はもう出ないだろう。

母の死

柳井の母が津山の天理教教会に行くためバスに乗りかけて倒れたのは、昭和三九年五月一〇日の朝だった。岩崎谷に一人わらび取りに行っていた私を周徳が呼びに来たので帰って見たら、中風だとのこと。母は大きな体でよく太っていたから、弟正道の嫁の茂子はたいへんだっただろうと思う。

その後、三朝の温泉病院にも入院し、杖をついて歩けるようになった。それからよく腕を持って私の所へ「巡礼にご報謝進ぜませ」と言って来るようになった。嫁が出かける時に米の上を均して出るので、天理教の神様にお饌米を上げることができないというのだ。あれほどのシャントコ婆さんが病気をすればこんなにも変わるものかと驚いた。川に出て洗濯をしていけば「澄ちゃん、ちよつと来い、ちよつと来い」と、柳井の新館の廊下の椅子に坐って手招きする。私もたいていは行っていたが、家の子守りや仕事もあるので毎日とはいかなかった。

ある日、病院から帰って、足が痛いので石田先生に診てもらいたいように言う。それで「正道が勤めから帰ったら薬をもらいに行ってもらおうから」と応え、晩に電話してみると、

虫の居所が悪かったのか「よその家のことに口を出さんでほしい」と言われた。腹が立つて母に「もう二度と行かないから」と言うと、「そんなこと言わないで来てほしい」と哀願した。

その夜、多量に薬を飲んだらしい。そばについていた妹が一言「お姉ちゃんが冷たい」と言うから」と言ったのが耳から離れなかった。

茂子が「このところお天気がよいから、お姉さん留守番にちよつと来て、出かけるから」と言うので、前日「いいよ」と請け合っていた。ところがその日、昭和四一年十一月十九日の朝、「来て、お母さんの様子がおかしい」というので行ってみると、母はたいそうよく眠っている。それで、私はいったん家に帰った。が、下の久世叔母さんがやって来て「これはどう見ても普通でない」と言うので、松本先生に往診してもらったら、少し心臓が弱つているとのこと。「注射をしておいたから朝起きたらケロリとしているだろう」と言つて帰られた。その夜は茂子と二人、母のそばにいて番をした。弟の正道は翌日旅行に出ることになつていたので母屋に寝た。

母は八時か九時ごろに目が醒め「えらい、えらい」と言い始めた。二人で代わる代わる番をしていると「おしつこが出たいようなに出ないからエミさんと呼んで」と言うので、来てもらつて管で小水を取ってもらった。だが、苦しみはだんだん激しくなるようで、「美智子と呼ぼうか」と言うと、「二人がいてくれればよいから、近所の人にも言ってくれるな」

と言う。寝させると起こしてくれと言い、起こすと寝させてくれと言うので、とにかく母の言うようにしていた。ところが、最後に「起こしてくれ」と言つて、茂子が母の体を起こしたとたんに事切れた。正道を呼び、私は分家や家、近所にと走つた。十一月二〇日の朝だった。

母にもいろんなことがあつた。子どもを亡くした悲しみに堪えた母だった。入院中の昌子のこともどんなにか気にかかつていただろう。人には言えない苦しみもたくさんあつたにちがいない。天理教に救いを求めた母の七一年の生涯はこの日閉じられた。

民宿仕事

やがて夫が上齋にもどり、農協の組合長に就任した。

牧野の家では、若いときから勤めに出ていた夫に代わり、勉学への断ちがたい思いを断ち切つて、祖父雅治について百姓仕事を身につけた長男周徳が家業を継いでいた。百姓仕事に慣れない夫は周徳によく叱られていた。

まだ柳井の母が元気だったころ、冬になると私たちは自宅を民宿にしてスキー客を受け容れていた。私のする民宿は、ご飯が腹一杯食べられるのと私のサービスがよいのとで評判がよく、一度に二〇人も三〇人も受け容れることがあつた。そんな時は、畳一畳に一人の割合で全部の部屋を使い、家族は蔵の中に寝た。夫は人の来るのを嫌がったが、それま

でお金など儲けたことのない私は一所懸命民宿仕事に精出した。

上齋は冬になると、たくさん雪が降るので、いつも「これが砂糖ならなあ」と村中の者が溜め息をついたものだ。昔の雪は今のようにならない降り方で、降りさえすれば村中の者が「ばんば」（木のスコップ）を持って立神（村下奥津との境）の下まで雪掻きに出た。家の軒に雪がつかえると入口まで段々をこしらえて出入りする。赤和瀬の方ではトンネルを掘って隣と行き来していたくらいだ。

岩崎谷にスキー場ができた時は、夫が組合長、柳井の母が農協婦人部部長だったこともあり、胸まである雪を掻いて山小屋まで荷物を運び、汁粉・うどん等を売った。土曜日の夜はやって来るスキー客のために提灯を持って道をあげ、夜中の1時、2時、時には夜明けまで夜通し起きていて、お客が来ると案内所まで迎えに行った。お客は薪で焚いた鉄砲風呂に入れてもてなし、食事には茶碗蒸し・鶏の唐揚げ・酢の物・山の物（わらび・ぜんまい・うど等々、塩漬けしておいたのを水出しして煮付けたもの）・ご飯・漬け物（上齋は寒いので漬け物のおいしさは格別だった。お客がよく持ち帰ったものだ）等をいっぱい出した。

当時、小学生の家孫が三人おり、お客の前に出たがるのを止めるのと、夫が酒を飲んで暴れるのには閉口した。一度は、ちょうど先生が小学六年生の生徒二〇人ばかりを引率して来ている時だった。夫が二階の床を剥がし始めた。生徒たちは「大きなねずみがいる」

と言つて騒ぎだすし、何時止めるか分からない夫の行状に、私は肝を冷やした。

急いで柳井に行つて、生徒たちは家でご飯を済ませているし、お金はそちらに払うので、宿泊だけでもさせてもらえないだろうかと頼みに行つたが、柳井もお客がいっぱいで途方にくれてしまった。急場はしのいだものの、そんなことが再三あり、今思い出しても冷や汗が出る。しかし、よくまあやつてきたことだと我ながら感心する。不思議にさえ思う。人間の力というのは想像もつかないほど出るものらしい。

夫を送る

昭和四八年、夫は組合長を辞任した。

その後も夫の心煩わせることが次々に起こり、荒れることがさらに多くなつた。毎日毎日飲んで暴れた。山谷に自分で小屋を建てた方がいいが、怒つては夜の夜中にその小屋に出かけて行くのには困り果てた。ある朝、ひどい恰好で戻ってきたことがあつた。聞くと、狐に化かされて道に迷い、山の上の方に上がらされたという。またある時は、周徳が草刈りに行くと、夫が道の下の方の田に落ちて呻いていた等ということもあつた。そんなことがあつて、昼働いて疲れきつているのに夜まで夫の後を付いて歩かなければならない情けない日々が続いた。

夫は勤めを辞めた際、退職金を五〇万円ほどもらっていたが、農協から年金をもらうた

めにはその中から足りない分を補填する必要があった。本人も払わねばと言いながら、とうとう全部飲んでしまい、五一年もの長い間勤めたにもかかわらず、結局厚生年金ももらうことができなかった。

命さえ縮まるかと思われるような情けない出来事が、どうしてこれほどまでにとと思うほど次から次へと起こっていた。そんな中でも、心がどんなに弱り切つていても、私はいつも暢気そうに見えるらしい。それが時々辛くなることもあるが、それでちょうどいいのかも知れない。

夫の亡くなる前年の暮れ、昼から歌井にチョロギを掘りに行つた。雪が降つていたこともあり、崖から下の川に落ちて左手首を折つた。上齋の医者は治療できないというので嫁の昭子に中央病院へつれて行つてもらい、石膏をはめてもらった。骨は順調に付いているようだったが、年末の忙しいときに何もできず歯がゆい思いをした。

骨折はすぐにでも治るかと思つたけれど、けつこう時間がかかり、痛みで何もできない日もあつた。結局治るまでに三ヶ月以上かかつてしまった。

五月十二日、田植えが始まり、夫も手伝つていたが、何かフラフラしているようなので、周徳が苗箱を洗うように言つて、田の中には入らせなかった。二、三日後、夫が「トンガリ」にいたので、村営国民宿舎の温泉に行くときに寄つてみると、酒に酔つていて、その勢

いで食ってかかるので放っておいて戻った。『トンガリ』というのは、私が民宿をして働いたお金で、農協に頼んで建ててもらった小さな尖り屋根の家のことである。夜になって山谷の小屋に行くのは危ないので、近くで夫が安気におれるような場所をと思つて作つた。

五月十七日、孫が恩原につれて行つてやると言うので、トンガリにいる夫に電話して家の留守をしてほしいと言つたら、黙つて帰つてきてくれた。この時すでに、あまりものが言えなくなつていたらしいが、気づかなかつた。二日酔いくらいに思つていた。

明くる十八日、朝起きた時、ちよつと大儀そうだったので「今日は日曜だからゆつくりしたら。若い者も休みたいだろうから」と言つたけれど、黙つてご飯を食べてトンガリに行つてしまつた。後片付けをして、私は蒲団を取つてきて干そうと思ひトンガリに行つたら、灯油をいっぱいこぼして机の前に坐つていたので「どうしたん」と聞いても黙つたままだつた。「お父ちゃん、えらいんなら二階に上がつて寝んさい。ええ蒲団かけてあげるから」と言うと、黙つて二階に上がつていくので寝させ、お昼の弁当を家に取りに帰つた。弁当を持つて戻り、食べられるように広げたら、夫の手から箸がポロリと落ちる。これはたいへんだと家に電話をし、石田先生の所にでも行こうと言うが首を横に振つて嫌だと言う。ものは言わないけれど、私の言うことは分かるらしく、頭をウンとかイイヤとかに動かし、明日松本先生に診てもらおうというので、家で休ませた。夜半、小水を漏らしたが処置をして寝させ、翌朝、松本先生に来てもらった。夫には糖尿病があり小幡という医師に診ても

らっていたので、救急車で小幡先生のおられる中央病院に行った。脳に卵大の血の塊が二つもあり、手術してもだめだと言われ、そのまま入院することになった。

入院中、拭けども拭けども後から後からひどい脂汗をかいていたが、田植えの済んだ昭和六一年五月二八日、朝十時四分、夫は意識の戻らないまま、あの世に旅立った。寂しい晩年だった。

三〇日は年尾となるので、二九日に葬式をする。行方の分からなかった次男寿夫が昔の面影はなくなっていたが、帰ってきてくれたのは嬉しかった。夫がどれほど心配していたか、それを思うと胸が潰れた。

生きておれば思いがけないことや驚くようなことも起こる。仕事は百姓をしているので忙しく、また胃癌になって手術も受けたり思わぬ怪我や骨折もしたけれど、身体が、芯が丈夫なので、精神的には楽に暮らせたと思う。長い一生の間にはほんとうにいろいろなことがあったが、長生旅行貯金という貯金をして毎年旅行もさせてもらったし、他にも機会があればいろいろな所に行かせてもらってもいい。それが私の人生の慰めなので、それくらいは赦してもらえらるだろう。

ヤエ子の不幸

年号が昭和から平成に改まるころだったか、娘ヤエ子の夫、井上昌一が、目が見えなく

なるにつれてあらぬ物語を作りあげ、ヤエ子に愀然して、一人では一步も外に出さないようになつていた。そんなヤエ子が氣にかかつてはいたが、上齋でも次から次へ心配事が起こり、どうしてやることもできないまま日を過ごしていた。

孫の美智子夫婦の所に行つたついでにヤエ子のところに寄つたところ、姑が自宅で病の床に就いており、毎日点滴を受ける一方、ヤエ子が「あとしり」を取つていた。驚いて、一週間ばかり泊まつて手伝つてやる。

そんな折も折、ヤエ子の長女がバイク事故を起こして入院したというので、∞月末、京都へ行つた。行つてみると、昌一は氣が狂つたようにヤエ子不信に陥つてゐる。姑の病は篤い。娘は大怪我をして入院。この家族はどうなつてゐるのだろうと思うとヤエ子が不憫で、京都にいてヤエ子を助けてやることにする。結果、一月京都にゐることになった。その年の十二月二八日黒谷の姑が亡くなり、二九日通夜、三〇日密葬。ヤエ子にとつてほんとうに大変な年だった。

明けて一月中旬ヤエ子の姑の本葬に行く。寺の葬式の大きさには驚いた。

それから二ヶ月ばかり経つたころ、義妹のタチちゃんから、ヤエ子が鬱病になつたので来てやつてくれという電話があり、びつくりする。大変なことが立て続けに起こり、ヤエ子の神経はまいってしまつたらしい。人生が真つ暗になつたようだった。

急いで黒谷に駆けつけてみると、ヤエ子は信じられないような姿になっていて涙が出た。表情が全く消え失せ、二、三日のうちにもどんどん悪くなっていく様子は見ていられなかった。すぐに帰るつもりで着の身着のまま飛び出して来たが、帰るわけにはいかなかった。しばらくはヤエ子の身の回りの世話や寺の手伝いをして過ごしていたが、このままではよくないと思い、決心して一人で医師を訪ねて相談し、入院させることに決めた。ヤエ子を病院につれていって入院させた時には、私も一生が済んだような気がした。

その後も京都に行っては、病院にヤエ子を見舞った。私がひとりで行って、爪を切つてやつたりしながら取り留めのない話している時、ヤエ子の心は一番安らぐようだった。十一月に入って、ヤエ子が京都の西山病院を退院した。入院させた時のことを思うと、とてもよくなっていたので、嬉しかった。四、五日京都にいて、上齋に帰る。我が家がやっぱり一番いい。この年は正月から京都通いでほんとうに大変な年だった。

ヤエ子の最期

ヤエ子の夫昌一は相変わらずだったけれど、それでも表面上は大きな波風もたたず、それなりに時は過ぎて行くかにみえた。

ところが、平成十一年になって、突然ヤエ子入院の知らせがもたらされた。その時はしばらく入院した後、一応よくなったということで退院したものの、再入院まで、それほど

時間はかからなかった。ヤエ子には伏せてあったが、病名は臍臓癌だった。だが、ヤエ子自身はうすうす知っていたように思う。入院前、近所のかかりつけ医を受診した時「あんたも苦労ばかりの一生やったねと、もう終わりのようなことを言われた」と力なく言っていた。

私が辛かったのは、ヤエ子が人生を諦めているように見えたことだ。ヤエ子には寄り添う者がいなかった。私にはどうしてやることもできなかったが、せめて最後の日までそばにいて、心穏やかに過ごさせてやりたいと思った。

平成十一年六月五日、二、三日前から昏睡状態にあったヤエ子は、この日逝った。

親にとつて子どもに先立たれることほど辛く悲しいものはないというが、ヤエ子が逝き、私は身を切られるような深い悲しみと喪失感に打ちひしがれた。二度と立ち上がれないのではとさえ思った。涙も出なかった。

地中に引きずり込まれるような思いを抱えて、上齋に帰った。そして、初めて朝早く草刈りに出た日、誰もいない朝の草刈り場で声を上げて泣いた。泣いて泣いて、泣いて泣いて顔を上げると、いつもと変わらぬ三ヶ上がそこにあった。朝の光に私の悲しみが静かに解け出していくようだった。

(未完)

あとがき

平成十一年、NHKテレビが「大黒柱物語」というビデオを制作した。「家」を支えてきた評判の老人を選んで、その苦労話を聞いて、昔日の貧しい、しかし力強い人間の姿を偲ぼうとする番組であった。どうした因縁からか、その一人に澄子さんが選ばれた。そして翌年には、草思社から『大黒柱に刻まれた家族の百年』3巻本として出版された。

ここに掲載されている写真を見ると、話し好きだった（そして、その語りの面白さは人を惹きつけてやまなかった）澄子さんの姿がよく写っている。なおも写真をよく見ると、手許に心覚えを記したと思われる黒い帳面があり、これを基に話していることがわかる。

この帳面は、孫の知郎がつけようとしていた日記らしく、三日坊主で終わったのを、澄子さんは自分の一代記の下書きに利用したらしい。

この帳面は、ヤエ子が西山病院を退院したあたりで終わっている。

本人も記しているとおり、我が子に先立たれるのは、親にとつて最も辛いことであろう。ましてヤエ子はたったひとりの娘であった。そのせいであろうか、男兄弟たちも、ヤエ子に対してはとくに優しい気持ちになるらしかった。

いよいよ最期が近づいたとき、上齋から駆けつけたあの無口な周徳が、ヤエ子の身体にすがって、「誰がお前をこがいにした」と言って激昂、号泣したという。

しかし、澄子さんは、このとき八十をこえていた身でありながら、ヤエ子の病室に泊まりこみ、特に最期の数日間、苦しむヤエ子を見守りつづけ、そして看取ったのであった。その精神力には驚かされる。

澄子さんは、ヤエ子の死については多くを語りたがらない。話し好きの、そしてどんな悲劇をも笑い話にしてしまう澄子さんも、こればかりはこたえたのであろう。ただ、「草刈りにゆくといつて、誰もいない畑で、ワーワー、ワーワー、手放して大泣きしちゃった」と言い、また、ぼくが京都の花見にどんなに誘っても、言葉少なに「春は嫌いじゃ」という。そのことばのなかに、澄子さんの哀しみの深さを想うばかりである。

九〇歳をこえると、さすがに身体が弱り、「たんぽぽ」で世話になることが多くなった。自分は百二〇歳まで生きると言っていた元氣はさすがになくなったが、それでも、百歳の祝いは「浅田」でどんちゃん騒ぎをするのだと、大いにはしゃいでいた。

しかし、平成二五年九月、長男周徳が逝った（享年七九歳）。

このこともあまり語ることはなかったが、「牧野も終わった」と、ぽつりともらした言葉

が心に残る。もちろん、そこには、自分の生家である「柳井」の影が脳裡をかすめていたに違いない。

澄子さんの書き残した自伝を読むと、そこに凝縮されたあまりに多くの、考えてみればあまりに重い人生に圧倒されるばかりである。

詩人の石原吉郎は言った。

適応とは「生きのこる」ことである。それはまさに相対的な行為であつて、他者を凌いで生きる、他者の死を凌いで生きるということにほかならない。

石原吉郎「強制された日常から」

(章夫記)

図4 二〇〇八年一月二六日写



いつき野の 風に吹かれて

平成二七年六月十九日 印刷
平成二七年六月二五日 発行

著 者 牧野 澄子

発行者 富田 章夫

発行所 終活倶楽部